
ダンジョントリッパー

小西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョントリッパー

【Nコード】

N3737X

【作者名】

小西

【あらすじ】

強運とボケと笑いで人生を歩む主人公が、異世界でダンジョン作成に勤しみ、地球への帰還を目指す物語。更新は不定期です。

初体験（前書き）

1 作目が行き詰まっているので書き始めたコメディー（の予定）です。完結させてから投稿する予定を変更して、投稿しちゃいます（汗）

初体験

目が覚めたら知らない天井だった。天井、というか剥き出しの岩みたいだ。夢かな、と思い二度寝してみる。なんてこつたい眠気がこない。もう一度目を開けてみる。天井は白い、なんてことない土色だ。

「だあゝ！…おつかしーな、どこだよココ？」

辺りを見渡す。寝ているのはフカフカのダブルベッド。どっかの高級ホテルにありそうな肌触りの良さそうな枕にフカフカの羽毛布団。ゴツい岩剥き出しの天井と壁にミスマッチ。本棚には何故か漫画。俺が好きな少年漫画から少女漫画、青年漫画にエロ本まである。おっと、これは秘蔵の無修正本が、何で此处にあるんだか。

「ふむ、家具はともかく、私物は俺の物だな。っつーことは誘拐、…はないなあ。寝てる間に引越し？…オカンならやりそう。つまり此处は新居？イエーイ！

……って、違っただろ俺！」

一人でツツコンで、落ち込む男。この物語の主人公である田中彼方。下から読んでもタナカカナタ、上から読んでもタナカカナタ、今春からピッチピッチの大学1年生だ。

「さーと、部屋をでてみるか？何がでるかな？何がでるかな？何が…

…… Oh my god！」

寝室から扉1枚でてみると、見たこともない広いリビング。呆然

としていると、目の前でくす玉が割れ、何やらでかでかと書かれており、その内容に奇声をあげる彼方。

「おめでとう、異世界トリップうううううう〜！」

ウィーーン

シュー

ポタッ

ウィーーン

彼方が驚いて叫んでいると、天井から何やら機械でできた腕のよ
うなものが伸び、足元に手紙と分厚い本が落とされた。機械は自動
で元に戻った。

「なんだよこれー？」

理不尽な展開に内心腹を立てながらも、興味津々に手紙を開く。
そこにはこんな事が書かれていたそう。

田中彼方様

この手紙を読んでいる、という事は無事異世界トリップされたよ
うですね。誠におめでとうございます。

私、株式会社トリッパーの異世界トリップ推進委員会 日本支局
長の神崎と申します。

先日は、忙しい登校の時間にアンケートに答えて頂き、ありがと
うございました。真摯な回答をして頂いた方の中から、厳選なる抽
選を経て、田中様が今年度トリッパー3名の枠に当選致しました。
アンケートに当選は商品発送をもってお知らせ、という事に同意さ
れていたため、トリップ発生をもってお知らせ致しました。

突然の事象に困惑されているかもしれません。ですが御安心下さい。チュートリアルも必要と思ひまして、基本操作のマニュアルも手紙と同封致します。是非、素敵なダンジョンを完成させ、日本にお帰りになる日を社員一同お待ちしております。
では、お元気で。

「Nooooooooooー！なんてこつたい！バカバカバカバカ！俺ってバカー！あの日の俺ってバカー！アホー！トンマー！」

手紙を読みながら彼方は振り返る。そう、先月の卒業式の登校風景を。

いつも遅刻ギリギリで、パンをくわえてダッシュするのが日課だった彼は、卒業式ぐらいは早く行こうと朝早く起きた。だが慣れない事をしたせいか、早すぎたため、ちんたらと遠回りして登校したのだった。普段走り抜ける通学路には、スーッ姿の美男美女が街頭アンケートを呼びかけていた。卒業式だからか、と全く疑問に思わなかった。それに同級生たちも、美男美女に釣られてアンケートに答えていた。流れに乗ってじゃあ俺も、と美女の胸元がよく見えるポジションを確保して、アンケートに答えた覚えがある。アンケートの商品云々の一文なんて、覚えてない。ただアレは揉みがいがあるイイ乳だなあ、と思ったのをよく覚えている。

「……てかさ、ダンジョンって何さ？」

田中彼方の長所は、落ちてもすぐ持ち直す所だ。散々過去の己を悔やんでいたが、早速順応しはじめている。流石は、バカナタといった所だろうか。

「これがチュートリアル？」

彼方は手紙と一緒にでてきた本を手にとって読みだした。

はじめまして、初心者トリッパーの皆さん。この本を読んで、活用すれば貴方も素敵なダンジョンメイカー5級を取得！

まずは、この本に貴方の体液をつけて、チュートリアル生物を呼び出しましょう。貴方のイメージに合わせて人型から動物・妖精・魔物など、様々な形態の執事呼び出せます。

さあ、早速やってみましょう！

「ダンジョンメイカー5級って何だよ一体。

まーとりあえず、呼び出してみるか！何なら、あんなイメージやこんなイメージもいいかも！グフフフ！」

ボンツ

大きな破裂音と共に現れたのは、猫耳の獣人。彼方好みの低身長・巨乳・スレンダーな女性だ。

「はじめまして、御主人さま？」

「キター——！キタキタキター——！ネコミミ万歳！巨乳万歳！」

「ご、御主人様？」

「うおっほん！…俺のことは御主人様じゃなくて、カナタンと呼ぶように。」

「カ、カナタン？」

「くう——！くる！イイ！もう幸せ！」

「…あの、私の名前をつけて下さらないと2時間以内に消滅してし

まうのですが。」

「ふむ、名前か。」

「…名前はミネア。通称みーちゃんだ！普段はみーちゃんと呼ぶんで、よろしく！」

「よ、よろしくお願いします。」

ミネアにリビングの使い方を手取り足取り教わり、萌えで満たされ、彼方はトリップ初日を終えたのだった。

みーちゃんの授業

目が覚めたら知らない天井だった。天井、というか剥き出しの岩みたいだ。夢かな、と思い二度寝してみる。なんてこつたい眠気がこない。もう一度目を開けてみる。天井は白い、なんてことない土色だ。

「って、昨日と同じ展開！バカなの？俺ってバカなの？バカバカバカバカ！」

ジー…………

そんなバカナタの様子を半開きの扉の隙間から覗く視線が1つ。中々起きてこない彼方を起こそうと、扉を開け始めた所で奇声を聞いて立ち止まってしまったミネアだ。扉を閉めれば、音が立ちバレバレだ。だが思い切って開くのも、勇気がいる空気だった。

「…はっ！この視線は？」

視線を感じ取った彼方が顔をあげると、扉にいるミネアと目が合う。

「Noooooooooo！みーちゃんに見られた！もう終わりだ！夢の世界はおしまいだあああああ——」

ボタン

ミネアは扉を閉め、見なかった・見たのは幻覚、と解釈して朝食の準備に戻った。暫くすると、焼けた卵のイイ匂いが寝室に運ばれ

る。

「ううううー……………クンクンクン、旨そうな匂い。」

コンコン

「か、カナタン？朝ごはんですよ」

「みーちゃん！萌え——！」

「ぎゃふっ！と、とりあえず離して、リビングに行きましょうか！」
「はい！」

食事にもミネアにも涎を垂らし、変態的な彼方。だが、意外と食事のマナーはきちんとしていた。

「ごちそうさまでした！」

「あ、カナタン。片付け終わったら、授業始めますからね。」「授業？も、もしかして恋のレッスン？グフフフ…」

「カナタン？……………涎が酷い。はあ」

一般家庭に黒板と教卓、机と椅子のセットは、普通存在しない。だが、ダンジョンメイカーの自宅には存在した。

「それでは、授業を始めます。準備はよろしいですか？」

「はい！」

「田中君、教科書を開いて。チュートリアルの5ページ。」

「はい！」

主人に似て、ミネアも形から入るタイプだった。スーツを着こなし、オシャレな赤メガネをかけ、銀の指導棒を持っていた。授業を

受ける彼方も、どこから出したのかわからないが、学ラン姿だった。

「1限はダンジョンと株式会社トリッパーの関係からダンジョンメイカーの等級についてを教えます。」

「早く知りたいです！」

「まず、株式会社トリッパーとはトリッパーによって構成される…

……………」

要約すると、異世界にありがちなダンジョン、地下迷宮や海底神殿・ほにやらの塔、これらは株式会社トリッパーに委託管理・創造・運営が成されている。委託するのは、その世界の神様だったり魔王だったりするわけ。全く驚きの新事実だよね！

ダンジョンの存在によって、その世界の文明が発展したり、発展しすぎて滅びないようにする働きがあるっていうんだから、ダンジョンメイカーも遣り甲斐があるかも。

そうそう、株式会社トリッパーには、ダンジョン部門とかタイムトリッパー部門とか勇者部、魔王部、そりやもう数えるのが大変なぐらい部門や支局があるんだって！かなり儲けているけど、地球では情報規制がされて極一部のしか知らない大企業らしい。本当かなあ？

「わかりましたか？」

「はい！あ、そうだ！神崎さんからの手紙にダンジョンを完成させたら日本に戻るってあったけど本当？」

「それについては、ダンジョンメイカーの等級と合わせて説明します。」

「お願いします！」

「ダンジョンメイカーの等級は下は5級、1番上は5段です。ダンジョンメイカー2級を取得すると、自国への行き来が可能となります。

す。神崎様が言うダンジョンの完成は、2級取得を指しています。ちなみに2級取得にどれだけ時間がかかって、トリップ前日の夜に時間を合わせて戻るのも可能です。」

「なんてチートだ……。」

「2級取得後は、ダンジョンメイカーを続けるか否かは、本人の意思に委ねられます。2級取得以後は、個人報酬が得られるため大半の皆さんはそのまま継続される方が多いです。」

「個人報酬って？」

「地球での金銭として受け取る方もいれば、ダンジョンを委託した神や魔王等からチートな能力を授かる方、様々です。」

ちなみに、初段になると株式会社トリッパーの契約社員になれば、3段以上は無試験で正社員に合格です。正社員になると手取りで月給30万から始まり、月給500万の平社員も多いですね。」

「まじすか？」

「やる気ができましたか？ではまずは5級取得に向けて、取り組みましょう！これで1限は終わりです。等級の細部は、教科書をよく復習しておくように。試験にでますからね。」

…号令！

「起立、礼！ありがとうございました！」

金銭感覚が麻痺するような話を聞いた所で、授業は終了した。結局、株式会社トリッパーは謎の会社であることに変わりなかった。

ダンジョンをつくらう

「目が覚めたら知らない天井だった。天井、というか剥き出しの岩みたいだ。夢かな、と思い二度寝してみる。なんてこったい眠気がこない。もう一度目を開けてみる。天井は白い、なんてことない土色だ。」

「って、もういいから！しつこい！…みーちゃん、お願い、やめて」

「あら、てつきり好きなのかと思ってました」テヘツ

「カワイイ…って違うから！」

猫耳をヒクヒク、尻尾をブンブン振りながら話すミネアは彼方にとつて悩殺ものだった。

「さて、今日はダンジョンを作ってみましょう！予習はしてきましたか？」

「予習？何ホレー、ワツカナイ」

「カナタンって、ホントダメ主人ですよー」

「ガーン！」

彼方が落ち込んでいる間にミネアはサツとスーツ姿になり、黒板等の授業セットの用意を済ませた。彼方が立ち直つてすぐ、目の前で行われたミネアのお着替えシーンを見逃した事でいじけた。そんな彼方をスルーして、ミネアは授業に入るのであった。

「では授業を始めます。田中君、チュートリアルの10ページを開いて。」

「ぐっすん、……ふぁーい。」

「まず最初に注意事項を1つ。ここは大事ですよ。」

……ダンジョンメイカートリッパーはチートではなく、スキルアップ制を採用しています。ですので、異世界トリップにありがちな始めから最強、なんて事はありません。」

「まじすかー！」

「まじつす！」

……級なし状態では、殆どのスキルがLv1です。と言っても、全て最弱ではやってはいけません。チュートリアル最終ページを開いて下さい。現時点のスキルなどのステータスが記載されています。随時内容が更新されるので、適時チェックして下さいね。」

「わぁーお！本当にLv1ばっか！」

んん？チートなのは、蘇生魔法Lv：max・アンデット作成Lv：max・自動回復速度max・強運・家庭具作成Lv：max？」

「蘇生魔法はダンジョンで死んでしまった冒険者を地上に送り返すのに必須です。死んでしまったモンスターにも必要ですけどね。自動回復は、一応ダンジョンメイカーはダンジョンの裏ボスなので、もし戦闘になった時のための能力です。まあ、滅多にないそうですけど。」

「家庭具作成って、役に立つの？」

「さあ？聞いたことないスキルですね。……あ、でもオリジナルの家具や日用品を作れるので、部屋が華やかになりますよ！」

「俺って一体！ついてないなあ……」

「でも運は強運なんですよ。」

「何故だ、何故なんだああああああああ——」

またもや落ち込みモードに入った彼方を白い目でみて、ミネアはお茶でも入れるか、とキッチンへ行ってしまった。

ズズズズー——

ミネアが音を大きく立てて緑茶を飲んでいると、やっと彼方は立

ち直ったようである。

「みーちゃん、1人でお茶してズルい！」

「あ、カナタン、お帰り」

ミネアは出会い2日目にして主人のあしらい方に長けていた。流石としか言い表せない。

「カナタンも戻ってきたことだし、ダンジョン作り実践しましょうか！」

「わくわく」

「チュートリアルの本を持って、奥のコントロール室へ行きましょう。」

ミネアに案内されてリビング奥の部屋へ入る。すると、一体この基地なんだと驚く程の設備の部屋だった。正面中央にメインになるのか大きなテレビがあり、その周囲を小さなモニター画面が沢山取り囲む。テレビの前には色々なバーやスイッチ、キーボード、何かをはめるような型がある。この世界は剣と魔法の世界のはずなのに、地球を凌ぐ機械類で、室内は満たされている。

「まずは、この型に本をはめましょう。」

指示された通りに、本を型にはめる。するとモニター画面が起動した。

「カナタンはまだ級なしなので、本を此処にはめないと機械が起動しません。級を取得すれば、触るだけで起動できます。」

「おおーハイテクー！」

「最初に地下1階をつくりましょう。カナタンはMAP作成Lv1

なので、基本パターンからMAPを選びましょうか。」

「MAP作成Lv1?」

「ダンジョン構造は一定期間でランダムに改変されます。元々基本パターンとして50パターンありますが、階が増えると当然足りなくなります。なのでダンジョンメイカーにはMAP作成能力が求められます。」

「うえ、俺、理数系はダメなんだけど…」

「難しく考えないで下さい。建築しろといってる訳ではないですから。迷路をつくるのは子どもでもできます。」

「そうだな!」

ミネアの誘導に沿って、モニターを見ながらMAPを選ぶ。色々なMAPをモニターで見ると、易しい迷路から複雑なものまで色々あった。中でも易しそうなMAPを選んだ。

「そうですね。初心者冒険者向けに丁度良いMAPですね。で、次はモンスター合成に入ります。」

「合成?」

「はい、合成です。モンスター合成には本のモンスター欄を活用する方法と捕獲ゴーレムを活用する方法があります。チュートリアルのもンスターの章を御覧下さい。」

「わ!スゲー載ってる!」

「こちらのモンスターは、等級に合わせて閲覧制限がかかっています。級が上がれば閲覧できるモンスターが増えます。これらのモンスターは各10回しか召喚できませんので、注意して下さい。」

「え!何で!」

「ダンジョンメイカーには常にオリジナリティーが求められます。ですからモンスター合成が必要なのです。ちなみに合成に成功してできたモンスターは、合成モンスター欄に登録すると、何体でも無制限に召喚してダンジョンに配置できます。」

「おおお！」

「まずはダンジョンにモンスターを配置したり、合成してみましよう」

「あいさー」

楽しげにモンスター欄を眺める彼方。微笑ましく見つめるミネアは、時に優しく時に厳しく指導したのであった。

本を用いてのモンスター配置や合成に慣れてきた頃、彼方はふと疑問に思う。

「なあ、みーちゃん。なんでわざわざモンスターをダンジョンに召喚するんだ？何か手間じゃねー？」

「あ、そうですね。でも利点はちゃんとあるんですよ。ダンジョンメイカーって、戦闘能力は皆無じゃないですかー。それを補正するのが召喚能力です。」

「でもステータス欄には召喚なんてなかったような……」

「それは級なしだからです。今は本なしで、召喚はできないでしょう？」

「そっぴやそうだな。」

「5級から地上に捕獲ゴーレムを送りだしたり、4級からは地上にできます。地上に出た時に魔物や盗賊に襲われたらどうします？ダンジョンメイカーは召喚で敵を撃退できます。」

「なるほど。で、捕獲ゴーレムって何よ？」

「スキルに捕獲ゴーレム作成がありますよ。捕獲ゴーレムは、モンスター合成に必要な動植物や魔物を捕獲します。捕獲した獲物は捕獲物欄に登録すれば、何体でも召喚可能です。捕獲物同士でも捕獲物と本のモンスターとでも、モンスター合成ができます。」

「そんな便利なスキルがあるのに、何で地上にでる必要が？」

「地下にこもってばかりじゃ、ストレス溜まるでしょう?」

「まあな」

「メインの理由は別ですけど。」

「別なのかよ!」

「……………株式会社トリッパーがダンジョンの管理・創造・運営を委託って話、しましたよね?」

「……………ま、まさか!?」

「そうですね!営業です!さりげなく、迷宮が誕生していて、最深部には秘宝が!とか。魔王がつくつたらしいぜとか。噂を流したり、街では得られない武器を売ったりして、あのダンジョンで見つけたとか話すんですよ」

「うげー」

「街でイベントが発生したり、それをクリアして新たなスキルを得たり、楽しめてんこ盛りです!」

「新しいスキル……………」

「それにせっかくつくつたダンジョンが繁盛しないと、莫大な違約金や能力返還の請求が、ですね……………」

「まさか、そのとばっちりが俺にも?」

「まさか……………ある所にはあるらしいです」

「…俺、頑張る!」

一通り、基本的なMAP作成やモンスター配置・アイテム作成・武器作成・罾作成の仕方を習い、せっせと地下5階まで作成した彼方。地下10階作成までは、階段作成スキルの使用が許可されていないため、冒険者が入ってくることはない。

「あゝ、何かありきたりのダンジョンだなゝつまんね!みーちゃん、癒してー」

「ああ、言い忘れてましたけど等級をあげるには、作ればいいって訳じゃなくて、センスも問われますからね。神崎様の月1評価で悪

い点でもとれば、私は消されちゃうかも……」

「なぬ、それはイカン！ なんと少しでも、みーちゃんは渡さん！ みーちゃん、期待してまっけて！」

評価次第でミネアが消されるというのは、全くの嘘。彼方にやる気が見られて、こっそりほくそ笑むミネアであった。

一方やる気をだして、コントロール室に駆け込んだ彼方。スキルを最大限活用して、オリジナリティーあるものを模索する。

「ピコーン！ そうだ家庭具作成Lv：max、これを活用する時が来た！」

なにやら思いついた彼方は、せっせと地下10階まで作成し、ボスモンスターを配置して、ダンジョン入口を開いたのであった。

冒険者Aの回想

アグス村の近くに廃虚になった神殿がある事は知っていた。古代遺跡だが、特に何の特徴もないありきたりの遺跡だ。先日ある遺跡調査団が、地下に繋がる階段を新たに発見したという。地下には魔物が徘徊しており、調査団は冒険者ギルドに発掘を依頼した。たまたまアグス村に滞在していた俺は、未発掘の遺跡に興味津々で探検に向かったのだった。

「ふむ、思ったより明るいな。壁は蓄光石か。神殿の秘宝でも隠しているのか？」

気を抜いていると、魔物が襲ってきた。角を生やした青目の兎がホーレンバッター集団で襲ってきた。

「炎よ、我が剣に纏え。敵を葬れ！」

集団の魔物も魔法剣を使えばイチコロだ。ただの剣士なら、さっきの場面はキツかっただろう。だが俺は魔法騎士、こんな雑魚には負けない。

地下5階までくると、此処は遺跡というより各地にあるダンジョンの1つなのではないか、という線が濃厚になってきた。今まで発見されなかった所に突然できる辺り、何らかの作意を感じる。これはギルドマスターに報告すべきか。魔王が作っているという噂は、本当なのだろうか。

「ふう、砂になれ！くそ、このガイコツめ！」

階層が下へ下へ行くほど、迷宮は複雑化し、魔物も強くなっている。先ほど倒したガイコツ《アンデットナイト》は鎧と槍を装備し、中々手強い。さすがの俺も、疲弊してきた。そろそろ休みたい、と思っただら階段だ。

「地下6階…？なんだここは。」

地下6階は今までの階層と全く違った。まるで王立図書館に迷いこんだかのように、本棚と机と椅子で占められている。階段を降りてすぐの場所に案内図がある。東西に扉があり、東側の小部屋は、冒険者休憩所と書いてある。

「ダンジョンだよな、ここ。冒険者休憩所って、なめてんのか？…でも、まあ、ありがたく休ませてもらうか。」

休憩所に入ると、キッチンとテーブルセット・トイレ・2段ベッドが3つあった。何故かテーブルの上には、湯気がたったお茶とケーキが置かれていた。

「怪しさ満点だぜ！誰が食うかよ！」

するとどこからか猿が部屋に入り、ケーキとお茶を食べて寛いで去った。

「…毒は入ってねえーってか。とりあえず寝かせてもらっぜ」

ベッドに横になると、不思議とすぐに眠りについた冒険者。疲れていたから、あつという間に寝てしまったのではない。ここはダンジョン内部である。ダンジョン内部に配置されたモノ全て、ダンジョンメイカーにより生み出されている。

「はっ！」

90分程経った頃、目覚める冒険者。

「枕が違つと中々寝つけないはずなんだがな……。なんだこの極上の眠りを誘うベッドは！」

……とりあえず、無くなつてゐる荷物はなないみたいだな。」

うつかり寝てしまつた事を反省しつつ、寝ている間に荷物が盗まれてはいないか確認する。紛失物もなく、ホツとため息をはいた。

「休憩所、というだけあつて安全ということか？」

冒険者は呟きながら、部屋を出る。部屋をでると、相変わらずの図書館のような室内を眺めながら、西側の扉へ向かう。休憩所から一本道で、魔物は一切出現しない。これは楽勝な階だな、と冒険者はニンマリした。しかし、楽勝であるはずの扉は押しても引いても横に押しても、全く動かない。握力に自信のある己に、ピクリともしない扉。オカシイなと思い、扉をじっくり観察する。

「フエイクかよ！」

扉に見せているが、それは騙し絵。扉のノブが壁に突き刺さつていただけで、扉に見える部分は壁に描かれた偽物。とても精巧に作られており、経験値の高い冒険者の観察眼があつたから見破られたが、初心者冒険者は騙されるだろう。

「くそっ！ふざけんなよ！」

フェイク扉に悪態をつく。するとフェイク扉のノブから何やら音が鳴る。

「北の白書よ、南の妖精解き放て。妖精の力と歌を得て、光の道開かれよう。」

ノブから聞こえたのは、幻想的な美しい声。女性のような男性とも言えるような、優しく力強い声音だった。

「美しい声だな……って、違う違う！
えーと、北の白書？まずはそれを探すか！」

部屋の北側の本棚に向かうと、ポツンと1冊目立つ白い本があった。あからさまに怪しいが、白い本はこれ以外に見当たらない。

「さて、何が起こるか……」

冒険者が白書を開くと、本が光る。何かが本からでてきたようだ。

「あー生き返る！お兄さん、ありがとう！」

「お、おう！……妖精族！？」

「久々に外に出して貰ったからお礼をしたい所だけど、今の私は無力なの。ね、お願い！私の力と歌声を解放する手伝いをしてくれない？」

「力と歌声？」

「そうなの、この図書室のどこかの棚の書にそれぞれ封じられているはずなんだけど……」

「しかしなあ……」

「力と歌声が戻ったら、お礼に何でもするわ！」

「うーん……、この下の階へ降りたりも可能か？」

「大丈夫よ！」

こうして冒険者Aは妖精に力を貸し、妖精が示す本の魔物を倒していく。妖精は力と歌声を取り戻し、冒険者を下の階層へ送り出した。

滅多に人と関わらない妖精族が、ダンジョン内の本に閉じこめられており、冒険者に助けを請い、見返りに能力を示す。一見美談のようだが、この妖精は一般の人間に知られている妖精族とは全く違った。妖精族や魔法に詳しく専門職にしている者なら、この妖精族の胡散臭さに気づいただろう。妖精族は、精霊に最も近い種族で、魔法に長けている。そんな種族がホイホイ本に閉じ込められるか。それは否だ。そんな事が罷り通るなら、妖精族を閉じ込めた本が流通しているだろう。幸い冒険者Aは妖精族に詳しくなかった。かの妖精は冒険者Aを下の階へ送り届けると、呟いた。

「任務かんりよー！」

冒険者Aは下の階へ、もうすぐ足をつくという時に耳に入ってきた声に、空耳かなと記憶から消去したのであった。

本の妖精に送り出されて7階へ降りると、足元は吊り橋だった。視線を下に向けると、水。ダンジョンなのに湖か、と驚いて全体を見渡す。良く見ると7階の端から端まで大きな釜のようなものが置かれ、水が張ってあるだけのようだ。これならもし落ちてでも大丈夫ということとはなかった。

「おいおいおい、ちょっと待て！下の階への階段は、吊り橋の先だけ。落ちたら階段に上がれないじゃねえか！」

キシヤー
ガシャガシャ

「うわっ！上から襲うな！揺れる揺れるう〜」

彼を空中から襲うのは蝙蝠のような魔物の群れ。ブルーバットブルーバットは、口から円錐形に尖った水の槍を放つ。人1人通るのがやっと、といった吊り橋から落ちないようにブルーバットの攻撃を避けると当然吊り橋は激しく揺れた。

キシヤー

「くそつたれは、凍っちまえー」

無詠唱でブルーバット数匹凍らせ、ブルーバットの群れが混乱した隙に吊り橋を駆け走る。息が切れるほど全力疾走して、やっと最初の足場に到着する。

「ふう、なんとか振り切ったが厄介な奴だな。思わず無詠唱で魔法を使ったからしんどいな。はあ……。」

不思議と吊り橋と吊り橋を繋ぐ足場の岩場には、魔物は現れない。何らかの魔法がかかっているのか、聖域なのかは謎だった。岩場は吊り橋と吊り橋を繋ぐ中継地であると同時に、水路へ降りる階段もある。さっさと吊り橋を渡って次の階へ行きたいが、水路の先にレアアイテムがあるかもしれないと思うと迷う。

「ふむ、最初の探索者として隅々まで調べる責務があるな。」

意を決して階段を降り、水路を進む。水路は意外と浅く、膝辺り

までしか浸からない。吊り橋からは人3人分ぐらいの距離があるから、吊り橋から落ちたら怪我するだろう。

チャプチャプ

チャプチャプ

バシャーーン

水路を歩いていると水路より深い所の底から青いトカゲの頭を持つ人型の魔物と、杖を構え肩に青いトカゲを乗せたリザードマン《リザードメイジ》が姿を現した。

「リザードメイジだと！」

リザードメイジの登場に驚きを隠せない。何故ならリザードメイジはリザード系の中でも珍しい存在で、地上では滅多に見かけない。それだけではなく強力な魔法を使うため、魔法使いがパーティーにいないと倒すのは厳しいからだ。彼も多くのダンジョンを探索した猛者だが、単独での遭遇は初めてである。しかも1対1ならまだしも、リザードマンとも闘わなければならない。

「まずいな……………」

「キシャー」

「この地の水よ、水に属せし我ら盾となり守り、愚かな篡奪者の矛となれ！」

彼がリザードメイジに躊躇している間に、リザードマンが襲ってくる。リザードマンと闘っている間にリザードメイジが水魔法を紡ぐ。丁度リザードマンの腕を切り落とそうとしていた時に、魔法が発動した。水の盾に剣は弾かれ、水の槍が右膝に刺さる。

「くっ！紅蓮の焰よ、我が身体と剣に纏え！

きああああー」

「キシヤーー」

「……忌々しい焰め！消してやるわ。雨よ降り注げ、彼の者の焰を消し冷ませ。」

「グギヤーー」

魔法騎士である冒険者は、専門の魔法使いほどではないが、強力な魔法が使えた。特に火属性の加護が強く、上級の火魔法も操れる。リザードメイジが、紅蓮の焰を消そうとしていた間にリザードマンは彼の手にかかって倒された。

「…貴様、よくも弟を！」

「へえ、そうだったか。お前も弟の所に送ってやるよ。」

蒼炎の焰よ、円陣となりて敵を包め！」

「な、蒼い焰だと！くっ……。ならば……。水に属せし我らの王よ。我が血、我が魂の叫びに応え、古の枷を解き放て。召喚、リザードクイーン！」

リザードマンを倒した勢いを途切れさせないよう、紅蓮よりも上位の焰でリザードメイジを襲う冒険者。してやったりの余裕の表情は、リザードメイジが紡ぐ呪文で段々と青くなる。

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

冒険者とリザードメイジの間の水が渦を巻き、周囲の水を吸いつてしまうかのように何やら形どりをしはじめた。やがて水は人型をとり、目の前には錫杖とティアラをつけたリザードクイーンが現

れた。

「私を呼んだのは、そのリザードメイジね。貴方の血と魔力を代償に、望みを叶えてあげるわ。……そう、この人間を懲らしめてあげればいいのね。久々に起こされたから手加減できるか分からないけど、遊んであげるわ。」

「な、リザードクイーンだと？」

冒険者はあまりの恐ろしさで、膝がガクガクと震えていた。リザード系の魔物は人間の様に王がいるという話があった。しかし本当に遭遇した事があるのは、伝説上の勇者や賢者といった凄い人達だけ。一介の冒険者が闘う事はない神クラスの魔物だった。

リザードクイーンはそこに存在するだけで、周囲に圧迫感を与えていた。それだけで冒険者を殺せそうな圧力である。

「んふふふ」久々の地上を楽しませてね！人間さん。」

「うわわあ！」

「あらん、怖がっちゃてーカ・ワ・イ・イ」

とりあえず、彼の者の持てし力を示したまえ。ステータスオープン！」

「えええ！怖いよ、おかあちゃん！」

「ふむふむ。魔法騎士Lv89、火の精霊王の落とし子ね。ああ、だから魔法使いでもないのに、蒼い焰なんて使えるのね。って、あら？火の精霊王の落とし子って事は本人は知らないと。」

「……ま、いつか。別に私、火属性じゃないし。」

「俺が火の精霊王の落とし子だと？」

ボウッ

冒険者が出生と火属性の加護の秘密を知覚すると、彼の身体は発

火し暖かい炎に包まれた。

「あら〜ん。敵に塩を送っちゃった？彼の内に眠る精霊の部分が覚醒してランクアップ！」

ふむふむ。フレイムプリンスLv1、火を支配せし者。

ま、さつきよりは闘い甲斐があるわね！」

「ら、ランクアップ！」

「あ、あの〜女王様、早く闘って下さい。そろそろ私の魔力もしんどいです。」

「ああ！貴方の存在、すっかり忘れてたわ！」

「ガク〜」

本来このダンジョンにリザードクイーンは住んでいない。リザードメイジの魔力を吸う事で、召喚が維持されているのだ。つまり、リザードメイジの魔力が尽きれば召喚は解除され、リザードクイーンは住处に戻るのだ。

「じゃ、仕切り直して〜逝くわよ！」

「どこにだ！」

「はっ！思わずツツコミを入れてしまった…。」

「チツチツチツ、2人共そんなんじゃ〜私と結婚できないわよ〜」

「するかよ！既婚者だろ！」

「憧れのリザードクイーンがこんな、こんな……………」

リザードクイーンは類い稀な美貌と強さと魔力を兼ねて持つ、リザード系の雌の憧れであった。しかし、中身は残念だった。それを知ってる者は、彼女に遭遇した僅かな人間と側近、夫であるリザードキングだけであった。

「きゃっ、憧れだなんて。そんな〜恥ずかしいー。もうそんなダメ

ダメなア・ナ・タ。ステータスオープン！

ふむふむ、私の愛しいファンのメイジちゃんの名前はエリザベス。古典的で恥ずかしい名前だから普段はエリーと名乗るのね、この恥ずかしがりやさん♪

リザードメイジLv53、始祖の血族。あら、始祖の血ね。だからレベルのわりに強くて私も召喚できたのね！でももっと努力しないと始祖の血に頼った闘い方から抜け出せないわよ！」

「…なんか萎えてきた。」

「ああ、もう魔力が…」

「あらん、まだ闘ってないのに！またね！」

バタツ

バツシャーン

リザードメイジが倒れ、リザードクイーンが姿消す。リザードクイーンの姿を作っていた水が辺りに戻る。リザードメイジもまた、どこかへ消えた。

水路の先も気になったが、リザードメイジより高位の魔物がいることを恐れ、冒険者は来た道に戻るのであつた。そして、寄り道せず吊り橋を幾つか渡り、次の階へ進むのだった。

地下8階にもなると、さすがに薄暗くなる。火の精霊を呼び光源とする。この階はダンジョンの上層のような大きな道でつくられ、迷路は複雑ではない。だが、油断は禁物だ。6階7階と、散々な目にあつたのだから。

「ん？なんだ赤い絨毯？……まるで、王宮の廊下だな。端端に鎧や剣を飾って並べるとか、凝ってるなあ。」

まるで王宮を歩いているような、温まる思いを抱きながら進む冒険者。しかし、それこそ敵の作戦だった。彼が8体程の鎧の横を通りすぎた頃、通りすぎた鎧や剣がひっそりと動き出す。

ガシャン ガシャン
ガシャン ガシャン

鎧はまるで誰かが中にいるかのように、彼の背後を行進する。剣と盾を構えて、兜の中で赤い光が灯っている。

ガシャン ガシャン
ガシャン ガシャン

「ん？なんだこの音？」

彼が振り向くと、8体の動く鎧スピリットナイトが襲いかかる。

「な、なんだコイツら！」

剣を構え、応戦する冒険者。しかし、恐ろしい事に背後を見せた事で後ろの鎧も動き出すのだった。

「くそつ、囲まれた！」

通路にあった鎧は計16個、即ちスピリットナイト16体に囲まれたのだった。

「逃げ場なしか……。なら、倒すのみ！」

剣や身体に炎を纏い、スピリットナイトと応戦する。鎧の持ち主

の魂でも宿っているのだろうか、中々の剣裁きである。人型の火の精霊を呼び参戦させつつ、隙をみて1体の首を落とす。しかし、首が落ちた程度では倒れないスピリットナイト。

「不死か！？どこが弱点なんだ？くそっ……………」

スピリットナイトの中身は空洞。首を落としても闘い続け、足が切られても闘い続ける。そして、時間が経てば切り落とされた部分は結合する。長期戦に持ち込むと厄介な魔物である。ただ機械人形のようなモノであり、動力はあり弱点もある。だが一度に16体もの大群を相手にしては、弱点を見つける事も難しかった。

シャッ

「ぐあああ——」

1体も倒す事が出来ず、胸部を切りつけられ、倒れる冒険者。倒れても、意識がなくなるまで身体中を切りつけられるのだった。彼は死を間近に感じ、意識を失った。

シャッ

シュッ

ガッチャン

ガシヤ ガシヤ

ガシヤ ガシヤ

ガシヤ ガシヤ

彼が意識を失うと突然攻撃を止め、元いた位置へ戻るスピリットナイト達。スピリットナイトは、それぞれが定位置へ戻ると動きを止めた。そして、赤絨毯が敷かれた通路では、通路の両脇に飾られ

た鎧などの武具が妖しく光っていた。

通路が静寂な空気に包まれると、倒れた冒険者の体が緑色に輝きだし、やがてその体は消え去る。通路に残ったのは、彼が身に付けていた武具と数個の宝石。それらもまた、数分後にはその場から消えていた。

死を覚悟した冒険者は、遺跡の地上部分にあるベンチに寝ていた。スピリットナイトに切りつけられたはずの数々の傷跡はどこにもなく、意識を取り戻した彼は夢だったのか、と思った。しかし、装備していたはずの剣や宝石がなく、鎧の傷つき具合をみて、夢ではなかったと悟る。地下8階で倒れたはずなのに、気づくと地上にいて、傷が癒されていたのは不可解であるが、己の無事に安堵するのであった。

「このダンジョンは危険だ。早く報告せねばな……………」

そう呟くと颯爽と、遺跡を後にするのであった。

妖精とマスターと冒険者A

最近、アグス村近くの古代遺跡に新しいダンジョンが発見されたという。最初に探索したベテラン冒険者が語るには、地下に行くほど奇妙な構造でハイレベルの魔物が現れるらしい。それでも市場で流通しないようなレアアイテムや魔物の部位を得られると、探索者は絶えない。

そんなダンジョンの地下6階を支配する魔物が一匹、今日も任務をこなしていた。

「今日はやばかったわー。本当に妖精族？なんて凄んでくるから、誤魔化すの大変だったし。あ、でもそろそろレベルも貯まってきたし、新しいスキルでなんとかならないかな」

地下6階にて呟くのは、妖精族を模した魔物。妖精族である云々は全くの嘘だった。ダンジョンメイカーにより本と合成されたピクシーである。

「えっと、あつたあつた、黒い本。さーてと、ステータス表示！

.....ナニナニ？

ブラックフェアリー

人工妖精Lv30、スキルポイントは残り50。んで、新しいスキルはーっと、あつたあつたコレコレ！妖精擬態Lv80へスキルアップ！これで魔法使いが来ても平気ね！」

低レベルのままだと、妖精族を知る高レベルの魔法使いに、正体を見破られる恐れがあった。幸いまだそのような探索者はおらず、先手を打つ必要があった。それに、もし正体が見破られたら戦闘しなくてはいけない。だから彼女はせっせとレベル上げに努めるので

あった。 そんな彼女の元へ訪れる男が1人。 ダンジョンメイカ―の田中 彼方、彼女を生み出したマスターである。

「スキルアップおめでと〜」

「マスター！感激です、わざわざ祝いに来てくださるなんて！」

「まあまあ、君には期待してるからね！……………それに10階ボスに辿り着く探索者もそろそろ現れるよ。」

そう、ブラックフェアリーは地下6階のフロアマスターであると同時に、地下10階のボスモンスターなのである。 地下6階では、わざと能力を制限するアクセサリーを身に付けているのだ。

ビー――

「あ、警報鳴ったね！ボス行つてらっしゃい〜」

「じゃあ、分体を置いてつと。 行ってきまーす。」

俺は、とうとう此処まできた。 あの屈辱の敗北から、およそ1ヶ月。 パーティーを組む事も一瞬頭をよぎったが、ソロ専門は変えられなかった。 対策に対策を練って、スピリットナイトを突破した地下8階。 仕掛けを幾つか組み合わせて道を拓いた地下9階。 そして辿り着いた地下10階は、まるで神殿の祭壇だ。 祭壇には1人の女が遠目に見える。 人間だろうか。

「お、お前は！地下6階の妖精族！」

「はい、ブラックフェアリーです。」

「…ブラックフェアリー？」

「ええ、妖精族じゃないです。」

「妖精族じゃない？つまり魔物！」

「ええ、この階のボスモンスターですが？」

「この階の……？」

「それ以外は内緒です。まずは私を倒さないと次へいきませんよ！」
「なら倒すのみ！」

「光よ彼の者の視界を遮り、刃となりて、降り注げ！」

「な、魔物が光属性を！？」

「この地に宿る銀よ、糸となりて、彼の者の足を捕らえよ！」

「な、地属性も！？」

……くっ、捕まってたまるか――」

「あら残念。風よ、彼の者の剣を奪え。」

「そうはさせるか！蒼の焰よ、我が武具を守護せよ。」

「ならば、蒼の焰よ、彼の者の令を破棄せよ。」

「な、俺よりも上位の火属性だと？」

この世界では一般的に魔物は闇に属するモノであり、光属性で滅
することができる。故に魔物が光属性の魔法を使うことは、本来あ
り得なかった。さらに冒険者を驚かせたのは、ブラックフェアリー
が多属性を使った事だ。3属性の魔法を使えるだけで、王宮に仕え
る事ができるくらい特別なことだからだ。

しかし、ブラックフェアリーは違った。ダンジョンメイカーによ
り本と合成された魔物。本は本でも、ただの本ではない。全属性の
記述がされた上級魔法書であった。つまり、ブラックフェアリーは
全属性の魔法使いである。前代未聞の魔生物であった。

そしてこの世界の魔法は、同属性同士の攻撃魔法は意味を成さな
い。だが、一方が片方よりも上位の属性魔法の使い手なら、片方の
魔法を破棄できるのだった。ブラックフェアリーが冒険者の魔法を
破棄できたのも、その法則に則ったものである。

「貴方が上位の火属性である事は、ダンジョン記録から明らかです。
でもね、私は上位のオールマイティー。そんな私に勝てる？」

「な、オールマイティーだと！」

「これで最後よ。」

地獄の闇よ彼の者を包め、神の裁きよ雷の剣となりて彼の者を切り
さけ！」

「うわああああ——」

バタッ

またしても力尽きて倒れる冒険者。数分後、緑の光に包まれて地上へ送られた。祭壇には1人、ブラックフェアリーが溜め息を吐いた。

「ソロでボスに挑むって、勇敢なんだか、馬鹿なんだか……。ま、ソロでも倒せない訳じゃないけど。騎士職って時点で上位魔法種に勝とうとか、無理あるわ——。」

ブラックフェアリーは冒険者Aを冷たく評価し、地下6階へ戻っていった。

村娘と冒険者A

ここはアーシユラ王国の東に位置する辺境の村。名をアグス村という。小さな村だが、近くに古代神殿がある名残なのか、高位神官を輩出する事で知られている。それ以外は何てことのない、のどかな村。神官様の御力もあつて、不作知らずの畑があり、食べ物には困らない。だがこれといった特産物はない。名物はないが、高位神官がいるため、神官に癒しを求めて遙々やってくる人もいる。村の結界の外はソコソコ強い魔物がいるので、冒険者ギルドも村なのにある。

そんなアグス村で生まれ育ち、特に都への憧れもなかった私。18歳で成人し、母の勧めでギルド受付嬢になつて早5年、ベテランと呼ばれるようになった今日この頃だ。

明くる日、私は運命の出会いをする。あの日から私は変わった。いや、目まぐるしく忙しくなつたとも言うのかもしれない……。

あれはまだ暑い乾期の半ば、1人の赤髪の冒険者が訪れた。彼は魔石が填まつた防具に身を包み、熟練の戦士を思わせる圧力を周囲に放っていた。

「すまない、この依頼を受けたいのだが……」

「え？あ、はい。ギルドカードをお願いします。」

切れ長の瞳に、細身なのに程よくついた筋肉、心地好い低音。受付嬢の好みを体現したような美形が、彼女の至近距離で話し出す。それだけで胸の音が速まり、惚けてしまう。

「えっと、魔法騎士のバルー様ですね。依頼は神殿遺跡の地下探索

で、間違いありませんね？…………では、手続きは完了です。」
「ありがとう。」

硬派のバルーは滅多に笑顔を見せないことから、表情筋が固まっていると友人からからかわれるほどだ。しかしふとした瞬間に魅せる笑顔に落ちては、後々涙する女性は数知れず。

受付嬢もふいに魅せられた笑顔に落ちてしまった。とんでもない破壊力である。

「あ、あの！」
「何か？」

手続きは終わったのに、声をかけられ怪訝な顔をするバルー。

「あ、あ、あの！その探索終わったら、探索の話、お酒飲みながらでも教えてくれませんか？」
「わかった。」

すんなりデートの約束を取り付けた受付嬢は、その日使い物にならないほど蕩けていた。一方のバルーは、とんちんかんな事を思っていた。

「そんなに探索が気になるなら、受付嬢なんて辞めて冒険者になればいいのに。変な子だな…………。」

恋人いない歴〃年齢のバルーは、鈍感で残念な美形だった。彼の友人は彼のいない所で、話のネタにしていたのは言うまでもない。

愛しの素敵な魔法騎士バルー様が、遺跡に探索しに行つて2日目。そろそろだろうか、ギルドに来たら、お帰りなさいって私が出迎えるんだから。朝から私は、ドキドキわくわく落ち着きなく、仕事中

も上司に怒られて散々。でも、彼とのデートって御褒美があるから挫けない。

なーんて淡い思いを抱いてた、あの時の私。恥ずかしくて逃げたしたいわ。

あの日から、もう1ヶ月。

「おい、手を休めるな！」

ああ、どうしてこんな事に？私は今頃バルー様とアバンチュールを楽しんでいたはずなのに。忌々しいダンジョンめ！

「いったーい。もうダメえ〜」

「今更可愛い子ぶつても無駄だ。仕事しろ仕事！」

「そんなあゝギルドマスターの横暴〜」

あの日、バルー様はボロボロの姿でギルドに現れた。ボロボロでもカッコイイと、惚けている間に、バルー様はギルドマスターの部屋へ行ってしまう。

バルー様は長々とギルドマスターと話し込んだ後、ギルドを出ていった。慌てて私はバルー様に声をかけたのだった。

「バ、バルー様？」

「ん？…ああ、受付嬢か。何だ？」

「あ、あのこないだ言ってたお食事の件な…」

「ああ、探索の事なら全てギルドマスターに話したからマスターから聞くとよい。」

「え！？」

「それと、これから暫く修行で裏の山に籠るからマスターによく頼む。」

「え？えええ——」

その後、私は石化状態だった所をギルドマスターに発見され大きな拳骨をもらう。痛みを抑える暇もなく、昼夜ギルドで仕事に明け暮れている。

あの日バルー様がギルドマスターに、新ダンジョンの存在と危険性、レアアイテムや高位モンスターの存在を明らかにした。直ぐ様マスターは全ギルドや王宮に通達をだした。その結果、多くの冒険者が探索に訪れ、仕事は毎日山積みである。

「あああのどかでゆったりしたギルドが、こんなに人で溢れるなんて。」

「ふん、その分昇給だからいいではないか。」

「でもそのお金使っただけの休みがないじゃないですかー」

「そうかもな。」

「人員増やしません？マスター入れて5人じゃ、捌ききれませんってコレ。」

「人件費が惜しい。」

「ええー」

「使い勝手がいい幻獣や使い魔がいればな。あ！お前確か服従のスキル持ってたよな？」

「え、まさかー」

「ダンジョンにはリザードメイジや妖精といった人型もいるそうじゃないか。」

「えっと——……」

「捕獲に行くならその時間もある給にするぞ。」

「う……………」

「そうそうバルー殿が受付嬢が探索に興味を示していたとか、探索にいくなら応援するとか仰ってたな」

「バルー様が！応援！……やる！やります私！」

「じゃ、この紹介状持って教会に行つて、適正職と加護もらったら冒険者登録するから、さっさと行つてこい。」

「バルー様、待つてて！」

奇声を上げながら、受付嬢は元気よく教会に駆け込んだ。その後ろでギルドマスターは、黒い笑みを浮かべていた。

アグス村で一番大きな建造物は、教会である。教会は神々しい光を放つ柱で支えられ、最奥の祭壇では神官長が祝福を与えてくれる。神官長へ紹介状を渡したら、祭壇へ上るよう促された。

「汝、ギルド専属の探索者になることを望むか？」

「はい。」

「その覚悟、しかと確認した。汝にアーシユラ神の祝福を与えよう。アーシユラ神よ、彼の者に探索者として最も相応しき職能と加護を与えたまえ！」

神官長の祈りに応じたのか、天から祭壇に光が注ぐ。温かい光が、私の体に浸透していく。

「さて、無事に職と加護を得たようだ。ステータスを確認してみよ。」

「はい。……我が身の力を示せ、ステータスオープン！」

「ふむふむ、こ、これは珍しい！」

「ナニナニ？」

調教師Lv1、支配者の資格を持ちし者？

スキルは、召喚Lv：1・檻作成Lv：1・認識阻害Lv：max・
獣倉庫作成Lv：max・服従の鞭操作Lv：max・他種言語自
動翻訳Lv：23・服従の言霊Lv：23・調教魔具作成Lv：1。
加護は、獣神の加護：獣や魔獣の攻撃を全く受けない。

…これってどういうこと？」

「これは大変珍しい。これならレベルが低くても安心です。貴方に
アーシユラ神の祝福を。」

「はあ。」

ただの村娘のはずが、何故か流されて調教師になってしまった。
とぼとぼと歩いてギルドへ帰ると、満面の笑みでギルドマスターに
迎えられた。

「で、どうだった？……ふつ、見込んだ通りだ。一般人が服従の
スキルを持つてる時点で、オカシイと思わなかったか？」
「でもおー……………」

カラン カラン

ショッキングな結果に受付嬢がうなだれていると、ギルドに人が
また1人訪れた。それはボロボロにやつれたバルーだった。

「バルー様？」

「ああ、受付嬢か。」

「どうなさったんですか？」

バルーはパーティーを組まずソロで地下10階に到達したことを
伝えた。

「わ！流石です！まだ誰も10階へは到達してないんですよー」

「そうか、だか、地下10階にはボスモンスターがいてね。全く相手にされなかったよ。まさかあんな魔物がいるなんてな。」

「どんな魔物だったんですか？」

「おい！傷をえぐるな！」

「いや、構わない、マスター。他の探索者のためにも伝えとこう。妖精に擬態した全属性の上級魔法を操る魔物だ。」

「全属性！？」

「手も足もでなかった。地下10階以降は、ソロでは厳しいだろう

……」

「っ――」

「なら！なら、私も一緒に連れてって下さい！」

「君を？」

「そいつは今日からギルド専属探索者として、教会から祝福もらった所だ。魔物の攻撃を一切受けない加護と、魔獣を使い魔にできる調教師のスキルはぜってえ助けになるぜ。」

「調教師……」

「お願いします！」

「………わかった。いいだろう。よろしくな、ええと……」

「ナ―シエです。バルー様、よろしくです！」

「バルーでいい。」

「え！じゃ、バ、バ、ババルー」

こうして冒険者Aは仲間を見つけた。

御主人様と私（前書き）

とりあえず予約投稿第1弾は、今話でお願いします。

御主人様と私

私が生まれて初めて目にしたのは、まん丸の真つ黒な瞳。私を創造して下さったマスターである、田中 彼方様。創造者であるのに、全く驕った雰囲気もなく、私は直ぐに打ち解けた。

マスターは最初、カナたんと呼ぶようにと仰ったけど、そのテンションについていけず、私はマスターと呼ぶ事で何とか納まった。マスターをカナたんと呼びつつ、手の平の上で転がすミネア様を尊敬するわ。御姉様、私一生ついて行きます！

あら、話が脱線しちゃったわ。……私はマスターが初めて創られた合成モンスター。マスターから文字を戴いて、カナイという名前。マスターのネーミングセンスの悪さには、脱帽したわ。でも、結構気に入ってるのよねー。ダンジョンには魔物としての名前があっても、固有名詞をつけられた者は少ないから。ああ、でもダンジョンの階が増えれば、私のような魔物も増えていくんだけどね。

「ん？カナイ、どーしたー？変な顔して。も、もしかして女の子の日か？」

「……………」

「やだあ、カナたんたらうデリカシーな・さ・す・ぎ！

…………… オイ、後でしばらくぞ、オラ！」

「みーちゃん、待った待った！冗談だつて！お願いだから、その包丁しまつて！」

こんなのが私のマスター、なんて理不尽な世の中なんでしょう。……なんちゃって。軽い冗談を言つて従者に怒られてるとうしようもないマスターも、好きなんだよね。それに、6階での子どもキャ

ラと10階でのお姉さんキャラの使い分けが、日々の楽しみだった。最初はね、マスターに無理難題だされたって思った。でも、冒険者達との関わりが楽しくて、演技にもつい熱が入っちゃったりして。このダンジョンで廃業したら、女優になろうかしら。

そういえば、あの魔法騎士さん、ついにパーティーを組んでたわね。でも、変な子なのよねー。

あの魔法騎士がソロを辞めて、探索しているってダンジョン通信に記載されてたから、どんな人を仲間にしたのかと、期待して6階で待ってたの。

そして来たのは鞭を持った、平凡な町娘ってところかしら。何もない地面で転んでは、魔法騎士に謝って、ただだけドンクサイのよ。魔法騎士に手を取って貰って、頬染めちゃって、初々しいこと。対する魔法騎士は全く気づいてない様で、乙女の敵だわー。

「ナーシエ、気をつける。この階は休憩所もあり、魔物も少ない。だが、人間を騙す妖精がいる。」

「妖精族ですか？私、見た事ないです。」

「正確には妖精族ではないそうだがな。」

「でもー、バルー様は以前その魔物の力で下の階に行ったのですよね？」

「ああ。だが10階で一度会ってしまったからには戦闘を避けられないだろう。」

「はい！」

「やつほー」

「出たな、諸悪の根源！」

「可愛いお姉さん、騎士さんの彼女？」

「え？や、そんなあーうふ。」

「誤解だ！」

「そうそう、誤解してるよん、私には創造主様がいるから、諸悪の根源じゃないよーだ！」

バルーとカナイは口喧嘩でもしているかのような雰囲気である一方で、ナーシエは恋の期待を真つ二つに切られ落ち込んでいた。

「先日の屈辱を、今日こそは果たしてやる！」

「うゝん、騎士さーん、私この階じゃ力が制限されてるから全力だせないよ。それでもいい？」

「なんだと？……なら尚更闘おうじゃないか！この階でお前を倒せなければ、10階踏破は夢のまた夢だろう？」

「…何、このバトルジャンキー。暑苦しいなあー」

「ナーシエ、君を頼りにしている！行くぞ！」

「！？………はい！」

結局、バルー達とカナイは戦闘する事になった。ナーシエはバルーの一言で、復活した。恋する乙女は、落ち込むのも復活するのも早かった。

「闇に属せし我の駒。召喚、ナイトスケルトン。目の前の敵を葬れ！」

「蒼き焰よ、剣に纏い、我が力となりて。」

「あらら、水と土よ、鉄よりも硬く焰よりも強き壁にて、我が身を守れ！」

ダンジョンで使役した魔物を召喚したナーシエに驚きつつ、咄嗟にコンクリートの壁を作り守りに入ったカナイ。

「うーん、召喚には召喚よね！」

「ちっ、なんだこの壁は！」

「スケルトンちゃんぐ」。なら……。土を喰らう大地の魔蛇よ、我が魔力を糧に現れよ。召喚、アーススネーク！」

「北国に住まわし氷の姫よ、契約に従い、我が身を守りたまえ。召喚、雪姫Lv20！」

「何！精霊召喚だと！」

ナーシエが召喚した蛇がコンクリートを食べている時、カナイは雪女を召喚した。現れたのは真っ白な着物を身につけた、色白の美少女。氷のような冷たい瞳に、触れた自分が凍るかねような白い肌、この世の者と思えない銀の髪の少女。

カナイは魔法使いのエキスパートのような者。たとえ能力が制限されていようが、レベルを落として使えば良いだけなのだ。

「どこまで規格外なんだ！」

「マスターはチートって言いますね。」

「あんなの勝てないわよ……」

闘いは続くものの、雪姫の守りを打ち破ることのできないバルー達。雪姫がすっかり殺してしまわぬように、カナイは雪姫を守りしか命じていなかったが。

「で、どうします？負けを認めて引き下がるのと、闘いを止めて素直に下の階へ送られるのと、どちらがいいですか？」

「…最後まで諦めるものか！ナーシエ！俺の前に立つて闘え！」

「あらあら、恋する乙女を盾にするなんて酷い男ですねー」

雪姫、やっとおしまい！」

「愚かな人間よ、その若さそのままに、凍らせてさしあげよう。」

雪姫が舞う。吹雪が辺りに舞う。視界は白銀の世界に包まれ、吹雪の音が耳を塞ぐ。音が止むと、そこには氷のオブジェができてい
る、……………はずだった。

「な！何故生きている？」

「ん、もしかして、お姉さんもチート？」

「…やった！生きてる！ありがとう獣神様！」

「獣神？……………カナイ様、恐らく獣神の加護で魔の力は効かぬ模様
です。役立たず、申し訳ない。」

「ユツキーの舞いは素晴らしかったわ。それにあんな方法で逃れた
なんて、馬鹿にしてるわ！ぶんぶん！ユツキーの仇はとつとくか
ら、雪姫返還！」

「ふっ、今の内に、反撃だっ！」

雪姫の攻撃が防がれ、劣勢に立ったカナイ。そこにバルーの剣が
カナイを襲う。

「ちょこまか逃げるなっ！」

「逃げ、なきや、痛い、でしょ！」

「ナーシエ！」

「はい！召喚、ナイトスケルトンズ！」

バルーの攻撃から逃げるカナイの退路を、ナイトスケルトン達が
塞ぐ。これで逃げ道はなくなった。

「…あとは、叩きのめすだけ！」

「くっ、ならば！天に住まわし聖なる神、アーシユラ神の使徒よ。

契約に従い我を守り、敵を倒せ。召喚、ミエルLv20！」

「…は？」

カナイが召喚の呪文を唱え終わると同時に、カナイの周囲を眩しい光が注がれた。闇に属するナイトスケルトン達は、ボロボロと崩れ去り、バルーの剣を纏っていた焰は蒼から橙に変化した。光が止むと、カナイの横には、教会の壁画に描かれる金髪で羽を持つ天使がいた。

「な、なんで、て、んしが？」

「え、魔物、なんでしょ？この妖精…。」

「詳細についてはノーコメントで。ミエルうゝ、私ね、今、スゴい腹立ってるの。獣神の加護なんて、ミエルには関係ないよね？」

「そうですね、聖なる攻撃は流石に防げないでしょうねえ。」

…くつくくつ、お主も悪いのう。」

「アナタ、そのセリフ言いたかっただけでしょっ！」

結局ナーシエとバルーはボコボコにされて、地上に送り返されたのであった。

「ってな事があったの。ね、だから、マスター？なんか対策立てて？」

「うゝん、神の加護かあ…」

神崎さんに問い合わせてみるかなー」

調査官とアゲス村（前書き）

予想外にPVが多くて恐縮です。

お気に入り登録や感想、ありがとうございます！

調査官とアゲス村

コツコツ コツコツ
カツカツ カツカツ
コツコツ コツコツ
カツカツ カツカツ

東京の一等地、丸の内のビルに向かって東京駅前の道を颯爽と歩く男が1人。朝の8時過ぎ、出勤途中の大衆に紛れても、彼は一際目立つ。顔は童顔、しかし彼から放たれるオーラは若者のモノではあらず。灰色のスーツが、彼の体のラインを浮かばせる。程よくついた筋肉と、プリッとしたヒップ、スラックスの上からも重量感がよくわかる男の象徴。すれ違う女性も男性も、彼の魅力にあてられて、暫し惚けるのが日常だ。

コツコツ コツコツ
カツカツ カツカツ
コツコツコツツ

大衆は道路を渡ると、各々の勤務先に向かっていく。それでも道は多くの出勤者で溢れていた。彼の勤務先も、丸の内のビルにあった。皇居が見渡せるとあるビルの一室。

「みんな、おはよう。」
「「「おはようございます、局長」」」

そう、ここは株式会社トリッパー日本支局である。『彼』とは日本支局長である、神崎だ。神崎 彰^{あき}、58歳バツ1、子どもなし。トリッパー歴43年の恩恵か、見た目年齢・肉体年齢共に20歳を

毎年維持している、化物である。

「さて、今日のスケジュールは、っと……」

神崎が指を机の上に翳すと、局長の机の上にA3サイズの半透明の画面が浮かぶ。空中に浮かぶタッチパネルを、慣れた操作で扱う神崎。同じように、空中に浮かぶタッチパネルを操作する社員や、画面に投影された人物と話す社員が神崎の視界に入る。

これは株式会社トリッパーだからこそできるオーバーテクノロジー。多種多様な世界の恩恵を最大限駆使、良いところ取りをして創られた技術だ。株式会社トリッパーのどの支局にも、導入されている。もちろん部外者への対策も万全で、部外者は扉を開けた瞬間にダミ―会社に転移されるのであった。

「ふむ、今日は新人ダンジョンメイカーの評価面談か。まずは人物調査書を……」

新人の人物調査書とは、新人の人間性を客観的に評価するもので、トリッパーになるまでの人生の軌跡を調査したものだ。要は履歴書と同じようなもの。PDFを開き、ペラペラとページを捲る神崎であった。

田中 彼方 かなた

1993年3月20日生まれ

静岡県出身

私立星都高校普通科卒業

2011年4月より某私立大学教養学部入学予定

家族構成：両親と8歳の弟とゴールデンレトリバーのポチ

……

…

「と、まあ平凡だな。」

……………ん？なんだ？」

田中 彼方、別称バカナタと同級生のみならず、肉親の弟からも評されている。無論、彼の授業態度も試験結果及び内申書は酷いもの。しかし、彼は某3流私立大学に指定校推薦で合格。両親は一般的なサラリーマンで裏口入学するほどの資産も、コネもない。ならば何故合格できたのか。多方面からの調査により、田中氏には類い稀なる強運の持ち主で、それまでも全て運で乗り切ってきたと判明。

……………

……………

…

「ふうん、強運ねえ……………」

「局長、転移門の準備ができました！」

「ありがとう。じゃあ帰りは夕方になると思うから、よろしく。」

光輝く水溜まりに踏み込むと、輝きが広がり神崎を包む。

「……………いつてらっしゃいませ……………」

太陽が真上に昇った頃、北の大森林の奥深くに閃光が走った。光は何もなかった場所から生まれ、光が大地に突き刺さると1人の男が現れ、光は飛散した。

「ふう、毎度ながら転移される場所がランダムってのも嫌になるな。座標を確認……………。ふむ、北の秘境、大森林か。ならばとりあえず誰かに見つかる心配はないか。だが、スーツ姿は目立つなあ。」

………変身！」

誰もいない森の中、呪文を唱えるのは神崎。神崎の体は光輝き、耳は細長く伸び、鼻は高く、髪は銀髪に、服装も中世ヨーロッパ調に変化した。

「ふっふっふっ、森の民エルフ。異世界と言えば、エルフだな。ハッハッハッ……」

誰もいない森で高笑いを堪能する神崎。人も獣も現れず風が吹くだけだった。

「さて、とりあえずアーシユラ神に挨拶でもするか。
…よっこいせっ！」

神崎が指1本を立て空を切ると、空間が歪んだ。慣れた手つきで歪んだ空間を開き、その中へ入っていく神崎。足を踏み入れた先は、真っ白い空間。視線の先に大きなベッドがあり、金髪金目に6枚羽の10歳程の少年が横たわっていた。

「何奴！」

「御無沙汰してます。」

「ん？エルフの知り合いなんて………あ！神崎だな？」

「はい。アーシユラ神もお変わりなく。」

「昼寝の邪魔をするな。」

「そんなこと言わずに。まずはこれをお納め下さい……。」

嫌そうに神崎を追い払おうとするアーシユラ神に差し出されたのは、浅い長箱1つ。

「おお！こ、これはっ！」

「伊豆のあの旅館の温泉饅頭でございます。旅館でしか買えず、大量生産されず、日持ちしないものを、アーシユラ神のためだけに確保してきました。」

「おぬし、わかつているじゃないか。ふっふっふっ。」

「さっ、薄茶もどうぞ。」

「お薄もだと！」

「おや、もしかや京都に行かれました？お薄って地元民ワードですよな？」

「ぎっくん！」

「アーシユラ神ともあるう方が、管理世界から離れるなんて馬鹿な事するはずないですよな？」

「そ、そうだと、とも！」

「…私、この後で天帝の御茶会に出席するのですが、もしかしたらうっかり口が滑って天帝の耳に入ってしまうかもしれませんねえ。」

「うぐっ！………望みはなんだ！」

「おや？私は疑問を投げ掛けただけでしたのに。」

「ありがとうございます。では望みは新人ダンジョンメイカーから聞いてきましょう。」

「くっ、な、何故だ。何故僕は毎度この手に引っかかるのだあああああ——」

アーシユラ神の嘆きの声をBGMにして、神崎は空間にあった白い扉を慣れた手つきで開いてくぐった。

神崎が開いた扉は、アグス村の公衆浴場の女子トイレに繋がっていた。扉を開いた神崎の目にまず飛び込んできたのは、大きな桃ではなく女性の尻だった。扉が開いた音で女性が叫び声をあげると同時に、神崎は咄嗟に扉を閉め、叫び声に駆けつけた兵士の目に留まらない速さでその場を後にしたのであった。

「ふうー… あぶないあぶない。あのまま誰かに見つかったら、変態の烙印を押されるところだった。アーシユラ神め、覚えていなさい、私を敵に回すとどうなるか。ふっふっふっ…」

その日、アグス村の外れの丘で高笑いする神崎の姿は、多くの村人に目撃された。後日、「イケメンなのに残念なエルフ」という称号を村人につけられていたと知った神崎は、次回は姿を消して潜入しようと誓ったのだった。

黒い笑いを終えた神崎は、村の中心部にあるギルドに向かった。ギルドは、2階建ての小さな事務所といった印象だ。小さくて古めかしいが、魔力が籠められた石材や接着剤を用い、地球の現代建築と遜色ない建物だった。さぞ力のあるギルドマスターと職員で切り盛りされているのだろう、と神崎は感心した。

建物の中へ一歩踏み出すと、騒がしい声が飛び交い、掲示板の前や食堂の席は人で溢れていた。食堂の混み具合から、まずは受付に行くか、と神崎がカウンターに視線を動かすと、そこには驚愕の光景が視界に入ってきたのだった。

受付で対応しているのは、受付嬢と思われる女性と壮年男性の2人だ。まあ、ここまでは弱小ギルドなら職員が少ないから、普通の光景と捉えよう。だが受付の後ろで事務作業をしているのは、骸骨闇の衣を纏い動いているアレは、《ナイトスケルトン》だ。何故魔物がギルドで働いているのだろうか。

「ん？兄ちゃん、どうしたんだい？」

有り得ない光景に、突っ立っていると、厳つい壮年男性に声をかけられる。

「あ、ああ……」

「あ、もしかして、このギルドは初めてかい？そりゃ驚くよな、なんとってダンジョンで捕まえた魔物を使役して、ギルドで働かせる鬼畜マスターは俺ぐらいなもんだろ。ハッハッハッ」

「……使役？貴方が？」

「イヤイヤ、俺じゃねえ。隣の娘っ子だよ。ダンジョンが見つかって忙しくなったから、コイツの服従のスキルを最大限活用した結果さ。魔物なら人件費からねえし、最高だぜ！」

「……そんなスキルが存在するんですね、初めて聞きました。でも、彼女が大怪我したり体調を崩すと使役力が弱まって襲ってくる、なんて事にはならないんですか？」

「ふふつ、安心してくれ。コイツはダンジョン最深部攻略パーティのメンバーなんだよ。魔法騎士のバルーが主に闘ってくれるから、そんな事態は起こらないさ。最新ダンジョン情報を流してくれる冒険者バルーの噂ぐらい聞いてるだろ？」

「そうなんですか、安心ですね。」

ギルドマスターの鬼畜つぶりを褒め称え、ダンジョン情報を絞りとり受付を後にする。丁度食堂が空いてきたので、適当に注文を済ませ席についた。

神崎が座ったテーブル席の斜め向かいのテーブル席に、一際目立つ美形の青年がいた。騎士の装備なのに、火精霊が彼の周りにまとわりついていていた。恐らく彼が件の冒険者バルーであろう。しかし、まあ、随分と高位な精霊じゃないか。蒼いし、人型かあ。そりゃ、魔法騎士を名乗るだけはあるか。

神崎が思考に耽っていると、バルーの席に受付嬢が向かってきた。ああ、あれは恋する乙女の瞳。無意識で服従のチャームを発動しているが、蒼い火精霊の加護に燃やされて無効化か。

「バルー、お待たせしました！」

「ああ、お疲れ。いつもすまないな、仕事の後に。」

「いえいえ、愛しのバルーのためですもの。へっちゃらです!」

「そうか。」

「で、どうなんですか? 状況は。」

「さっぱりだ。オールマイティーの上位魔法を使う妖精と闘える魔法使いが、わざわざこんな田舎までこないさ。」

「……妖精?」

「!?!?」

2人の会話に聞き耳を立てていた神崎は、想定外の魔物の種類に声を上げてしまった。神崎の声に驚き、2人は此方へ振り向いた。

「あ、ああ、すみません。私、今日此方へ来たばかりの冒険者です。ギルドマスターから御二方が最深部まで攻略しているパーティと御聞きまして、つい聞き耳を立ててしまいました。申し訳ありません。」

「いや、構わない。」

「なんだあ、びつくりしたー」

「それで、オールマイティーの上位魔法を扱う妖精がいるとは本当なのですか?」

「ああ。10階のボスなんだが、このパーティには魔法使いがいないから、強力な魔法に手も足もでない。」

「おまけに、天使も召喚できるし、踏んだり蹴ったりよ。」

「…上位召喚もですか。化物ですね、その妖精。」

「まあ、正確には妖精族ではないらしい。」

「彼女曰く、人工妖精ブラックフェアリーだそうよ。可愛い容姿なのに、えげつない攻撃魔法を浴びせてくるのよね。はあ…」

「…人工妖精。つまりは魔王でもいるんですかね、ダンジョンに。」

「わからない。だが魔王がいたとしても俺達が必ず倒す。」

「きゃっ、バルーってばカッコイイ!」

バルー達からダンジョン情報を聞き出している間に食事が出来上がり、彼らと別れた。

はて、オールマイティーの上位魔法を操る人工妖精ですか。恐らくピクシーと何かを合成したのでしょうか。でも彼はまだ級なし。一体どうしてでしょうか。世界を渡る時に得る能力は、勇者トリッパ―や魔王トリッパ―に比べると、ダンジョンメイカートリッパ―は役に立たない能力ばかりのはず。…いや待てよ、彼は強運の持ち主だ。使い様によっては、チートもありうるのか。うーむ、これはダンジョン探索が楽しみですね。田中くん、楽しませてくださいよ。

「お客さん、食べ終わった後に、1人でニヤニヤしててキモいですー」

食堂でも怪しい残念なイケメンの称号を得た神崎であった。

ダンジョン調査中（前書き）

お待たせしました。

やっと、次回主人公カナタンが登場できそうです（笑）

ダンジョン調査中

今日もアグス村のダンジョンの入口は多くの冒険者が行き交う。ただ晴天だったはずなのに、ダンジョンの周囲は怪しい霧が立ちこめていた。

「今日はどうも蒸し暑いなー。変な霧もでてるし。…あ、ともども冒険者の皆さん、ギルドカードの呈示と通行料を…。え？通行料をまけてくれ？だめですよー。私達門番が入口を取り締まってるから不穏な輩が探索中に襲ってこないし、未熟な冒険者が危険をおかさないかないでしょうに。…はあ、ダメなものはダメです。どうしても仰るならギルドマ、ーえ？極悪非道鬼畜ギルマス？

…ほうほう、そのように伝えておきましょう。ええと、貴方の名前は…と…」

ダンジョンの入口で、冒険者と門番の通行料を巡る口論をジッと見つめる視線があった。しかしその場には、若い冒険者と厳つい顔の門番しかいなかった。いや、正確には霧に扮した神崎がその場にはいたのだ。

ふむ、ギルドカードと通行料ですか。システムとしては悪くないですが、ちよつと面倒ですね。そもそもギルドカードは持つてませんし…。仕方がありませんね、霧のまま入って、人のいない所で変身を解除しましょう。

ビューー——ウ
ビューー——ウ

突然強い風がふき、に怪しい霧は風に乗ってダンジョンに入り込

む。門番が気づくと怪しい霧は立ち消え、空は青く晴れていた。

コツコツコツコツ
コツコツコツ

神崎はエルフの姿に戻り、茶色いフードを深く被り、ダンジョン内を歩いていた。魔物に襲われている冒険者を観察したり、宝箱の中身をチェックしたりとダンジョン内を評価して回った。しかし神崎は一度も魔物と戦わずに地下1階、2階、3階と降りていった。何故なら神崎が模っていたのは、ただのエルフではなかった。金の瞳に銀の髪を持ち長く先が尖った耳を持つ、この世界でたった1人の古代ハイエルフだったのだから。自我を持たないノーマルモンスターは、本能で適わない敵には挑まなかったのである。

「ふう、流石にハイスペック過ぎましたか。ノーマルモンスターは私を恐れて襲って来ませんし、魔物合成の評価がしづらいですねえ。さて、次は問題の地下6階ですか。………おお！こ、これは！」

地下6階に足を踏み入れると、赤黒い灯りで照らされた家屋や柳川などが見える。おどろおどろした不気味な音が遠くから鳴り響き、川底からは恐ろしい呻き声が聞こえてくる。家屋に目を向ければ、半透明の人が出たり入ったりしては、怪しく笑っていた。

どうやら地下6階はお化け屋敷のようだ。村での情報では図書館とのことだったから、最近ダンジョン改変されたのだろう。それにしても、不気味だ。

「ふふっ、ダンジョンの中なのにお化け屋敷とは。実に良い発想ですね。ですが見た目だけじゃだめですよ。中身はどうなのでしょうね。…あ、どうもこんにちは、ゴースト君。そんなにビクビクしな

いで下さいよ。取って食うなんて事しませんし。ふむふむ、君はアレと合成されてるんですね。なるほど…」

呻き声がする不気味な川の橋を渡り、テクテクと様々な家屋の横を通り過ぎる神崎。様々な場所から飛び出る幽体に挨拶しては観察し、合成具合を確認していく。お化け屋敷もそろそろ終盤だろうか、と思い始めた頃、視界の端に2人の冒険者と幽体が口論している姿が映った。

「おや、あれはバルーさん達ですねえ…」

怒った表情で幽体に詰め寄る冒険者は、ナーシェとバルーの2人だった。

「ちよつと、アンタもあのブラックフェアリーと同じような魔物なんでしょう？」

「魔物は斬る！」

「ぼ、僕は良い幽霊です！封じ込められてた宝石を見つけてくれたお兄さん達にお礼として下の階へ、お」

「あの女狐と同じパターンだわ！」

「し、知りません！」

「問答無用！」

紅に輝く宝石を核とした幽体が、どうやらこのフロアの責任者のようだ。宝石から強い魔力が感じられる。バルーが剣に炎を纏わせ、幽体を切りかかると、幽体は咄嗟に赤いバリアを張り攻撃を防ぐ。

「やっぱり力を隠してるのね！」

「うっ、でも僕は非戦闘員です。」

「俺の攻撃を防いでいながら言い訳か？」

バルーは蒼火を幽体に繰り出しながら切りかかり、ナーシエはこの階で捕らえた土属性の幽体と《ナイトスケルトン》を召喚し攻撃を命じた。紅宝石の幽体は攻撃に対して防御に徹するも、徐々に苦悶の表情を浮かべていった。

「うう、止めて、いたいよ。痛い痛い痛い…」

幽体の呻き声は次第に大きくなり、宝石から禍々しい紅色の光が溢れでる。幽体の周囲の魔力が膨れ上がり、バルー達を呑み込む勢いがあつた。

「痛い痛い痛い痛い…。赦さない赦さない赦さないいいいい…」

「こ、こんな馬鹿な魔力つてアリなの？」

「逃げろっ、ナーシエ！」

2人に逃げる隙も与えず光が呑み込もうとした瞬間、辺りに叫び声が響き渡った。

「ギヤアアアアアア」

張り裂ける様な叫び声をあげたのはバルー達ではなく、優勢だったはずの幽体だ。強い魔力を発していた宝石にヒビが入り、幽体は全身に駆け巡る痛みに苦しんだ。禍々しい魔力の光を浴びるはずだった空間には、清らかに光るドームが形成され、2人の目の前に幽体から守るように立つ人物がいた。

「どうやら間に合ったようですね。大丈夫ですか？」

2人を助けたのは、神崎だった。最初は観察に徹していた神崎だ

ったが、このパーティならボス部屋まで行くだろうと考え、急遽助けに入ったのだった。

「アキラ!?」

「とりあえず話は後にして、目の前の敵を倒しましょう。私の力では本体にヒビしか入れられませんでしたから。止めは、バルーさん、お願いしますね。」

「本体?」

「あの幽体は宝石を核にしています。ですから宝石を割ってしまえば倒せるはずです。この階の幽体は皆、何かの物質に宿ってるにすぎません。私の魔法で守りますから、はやくっ」

「わ、わかった。」

幽体は痛みにも悶絶しながらも、再び魔力を膨らませ始めていた。

「光よ風よ、森の民の声に応えよ。血に汚れた闇を吹き飛ばせ《ホーリーストーム》。光よ集え、闇に打ち勝つ聖なる加護を我らに与えよ《天使エールの歌声》。」

神崎は呪文を唱え、聖なる風で禍々しい紅い光を飛散させ、光属性の衣をバルー達に纏わせ続けるために、神秘的な歌声を披露した。歌っている時の神崎は、男性なのに女性のような美しいソプラノ声。歌いだす前にはなかった華やかさを放ち、母のような温かさや父のような逞しさを同時に発していた。神崎の体は光輝き、背には鳥のような白い翼をもち、歌いながら浮いていた。

「な!光と風の混合魔法!しかも続けて、憑依魔法まで!」

神崎が天使エールを憑依させて歌い、ナーシェが驚き呆けている間にバルーは宝石を剣で砕いた。

「ギイアアアアアアア！」

「終わったな。」

「赦さない赦さない赦さない……。後で覚えてろよおお」

宝石が砕かれ力を削がれた幽体は捨て台詞を吐いて消え去った。幽体が去ると同時に神崎の憑依魔法も解け、元に戻ると呆けていたナーシエも正気に戻ったのだった。

「アキラ、助かった。感謝する。」

「……アキラ！ナニアレ！光属性は驚いたけど、エルフだからって事で百歩譲ったとしてもよ。混合魔法に憑依魔法ですって？まさに私達が探し求めていた高位の魔法使いじゃない。ねえ、正式に私達のパーティに入らない？」

「……俺からも頼む。」

「えーと、そうですね。……大変魅力的なお話なのですが、エルフの里の任務でこのダンジョンを調査しに来ただけですので。」

「そっか、残念だね。」

「……今日限定で、臨時パーティを組むのは構いませんよ。」

「本当か！？それでもいい。助かる。」

「とりあえず、今日だけだけどよろしくね。」

神崎が臨時だがバルーのパーティに入った事で、高位モンスターの脅威は大部減った。神崎は高位魔法でパーティ員を守ってくれるだけでなく、魔物の弱点に合わせた属性魔法の補助魔法で助けた。そのおかげでバルー達は安心して戦えたし、2人だけの戦闘より楽に敵を葬れた。

「やっぱ、魔法使いがいるといないとじゃ全然違うわー」

「確かに清々しい気分だな」

「そういつていただけで嬉しいです。さて、やっと10階ですね。」

「ボスはやっぱりさっきの宝石少年なのかな」

「アキラ、守りは頼んだ！」

3人はスイスイと階段を降り進め、ボスのいる地下10階へ降り立った。バルーとナーシェには同じみで屈辱の階である地下10階祭壇があるだけのフロアには、少女がいた。

「あら？いらつしやいませ。私の大事な大事な坊やを悲しませた酷い御方たち。歓迎しましょう。」

地下10階へ降り立った3人に背を向けていた少女は、そう言つて振り向いた。少女は1メートル程の身長しかなく、色白でまるで人形のようなだった。美しく艶のある黒髪は腰まであり、額に菱形のエメラルドの宝石が填まり、唇には紅がうつすらと塗られていた。服装もこの世界では見かけない鮮やかな着物で、バルーとナーシェの目には奇異に映った。

「ふふふふっ」

少女は笑みを浮かべて笑いだし、宙に浮かんだ。そして少女は、バルー達の足元を指差し指を振った。すると少女の指の振りの動きに合わせたかのように、地面が揺れ、地面に裂け目が走った。

「無詠唱で地震ですか。さすが、ボスですね。でも…」

地面の裂け目にバルー達が落とされそうになるも、神崎は無詠唱で3人の背に半透明の翼を与え、体を浮かせた。

「あら、随分と高位の魔法使いがいたのね。ならこれで、どうかしら？」

少女の周囲に様々な色の宝石が浮かび上がると、少女はその内の1つを選んで掴み何やら呟きながらバルー達に向けて放った。そうして現れたのは1匹の鋼鉄の龍だ。

「何？地龍！？」

「……あれはシュードラ。地属性の龍で高位に属し、アーシユラ神から名を賜る程の実力を持つ。鋼鉄の体をもつにも関わらず軽やかに宙を舞い、口から高熱の炎を吐き出せる。」

「そうよ、頼もしい龍でしょう？……にしても、貴方博識ね。」

シュードラの目がギョロリと動き、バルー達を鋭く睨んだ。鉄分の色だろうか、漆黒と言える程の色濃い黒の瞳から、肩がすくむ程の殺気が放たれた。それだけでバルーとナーシエは萎縮してしまっ

た。

「バルー！ナーシエ！」

「はっ、あつ。」

「しゃんとして下さい。シュードラは確かに強敵です。ですが、バルーの蒼火でなんとか勝てる相手です。ナーシエと協力して倒して下さい。私の相手は」「私ね。ふふふっ」

対シュードラ戦では、ナーシエが複数の魔物を召喚しシュードラの足留めを担った。ナーシエがつくった僅かな隙について、蒼火を全身に纏い闘うバルー。シュードラの体は硬いが、純度が高い蒼い炎によって少しずつ傷がつき、それが積み重なって大きなダメージを与えた。

「はあああああ！」

ダメージが大きく少しよろけた隙を見逃さず、バルーは渾身の力で剣を振った。

一方の神崎と少女は無詠唱魔法や高度な魔法の短縮詠唱を互いに繰り出し、バルー達がシュードラを倒した頃には祭壇は更地と化していた。

「はあはあはあ、やるわね貴方。」

「ハッ、それはこちらのセリフですよ嬢さん。地属性だけで、私とここまで闘える魔法使いに久々に出会えて僥幸ですよ。」

「フッ、アーハッハッハッ」

「何がおかしいんですか？」

「私が地属性しか使えないなんて、誰がいったかしら？」

「ま、まさか！」

「ふふふふ。……アグスの地に宿る風、水、火、地の精よ、集え。混ざれ。唸れ。放たれ！」

少女の精霊への呼びかけで、4属性の魔力が辺りから集まりだし、集まる力が止む気配はなかった。魔力が少女の体の2倍程集まると、混ざり始め、段々と禍々しく力強い圧力をバルー達に与えた。

「バルー、逃げて下さい。これだけ大きな魔力の爆発は危険です！」

神崎は体をガクガク震わせ、蒼白な表情でバルー達に訴えた。そんな神崎であったが、彼は演技派トリッパーなので、脳内はバルー達とは反対に明るかった。彼は能力を抑えて闘いながら、少女に好敵手が現れて嬉しいと平然と嘘をのたまった。そして闘いながら少女の弱点を既に発見していた。神官職か、サイレントスキルを持っていれば一撃なのにねえ、と。

少女は彼らに逃げる隙を与えず、魔力の渦が破裂した。バルー達は吹き飛ばされ気絶すると、ダンジョンの仕組みに則った処理をされ外へ送り出された。

「ふう、しつこくて粘っこの冒険者達でしたわね。さて、戦利品を回収しゅ！」

「どうも」

「な、なんで？生きてる！」

「あ、そうか、変身解除。」

生きていたのは、勿論神崎である。驚いて目を大きく開いている少女の様子に構う事なく、マイペースにエルフの状態を解いた。変身が解かれて現れたのは、サラサラな短髪で黒髪な人間。端正な顔だちで、スーツをビシッと着こなしている。少女が見惚れていると、胸ポケットから名刺を取り出し、少女に差し出した。

「この度は素晴らしい戦闘を披露して下さいありがとうございます。私、株式会社トリッパー日本支局長の神崎と申します。我々がこちらへ派遣しました、田中彼方氏のダンジョン作成経過を評価しに伺いました。貴方の主人である彼の所まで、案内していただけますか？」

「はっ、わっ、えっ？…はわわわわっ！ええええ——」

その日のダンジョンを探索した冒険者から、不思議な奇声が下層からこだましていたとかしていなかったとか、酒場のネタになっていた、とき。

評価面談（前書き）

お待たせいたしました（汗）

読んで下さりありがとうございます。

評価面談

柳が生い茂る山地に、1人の青年がいた。彼は何やら鼻をくんとヒクヒクさせ、辺りに漂う香りを追い求めて歩き回った。

「桃だああああああ！」

香りのもとは、淡い桃色に色付いたブリツとした桃。彼の視線の先には、沢山の桃が木になっていた。彼は涎を垂らし、たまらず手を伸ばした。

ブリツ

ブリブリブリ

ブリ

「ん？」

彼が掴んだのは桃ではなかった。手で掴んだのは、女性の胸だった。

「おっぱいだあああああ！」

その事実にはハツとすると彼の周囲の風景は緑溢れる山地ではなく、お馴染みのリビングだった。

「カナタ〜ン、涎垂らして何の夢見・て・た・のー？…もう、そんな触り方されたら感じちゃう…キャッ」

青年の名前は、田中彼方。従者のミネアの膝を枕にし、ソファ―

で昼寝をしていたのだ。彼の手は、未だにミネアの胸にあり、脳が正常に覚醒してないのか揉み続けていた。ミネアは珍しく嫌がる素振りもみせず、寧ろ頬を赤らめ恥ずかしがっていた。

「こ、これは？夢か？夢なのか？…おお、神よ！」

「もうミネアもう我慢で・き・な・い。カナタンの初めて、はやくちよくだい。キャツ、言っちゃった。」

ミネアの大胆発言に彼の興奮は増し、彼は手を胸からミネアの顔を掴み唇をうばーう事はなかった。

「……………君、だれ？」

「え？」

彼は突然真顔になり、ミネアへ問う。女体への欲望で興奮し邪な表情は一転し、怒りのオーラを目の前の女性に発した。

「ミ、ミネアですよ、カナタン？」

「嫌、違う。みーちゃんなら、胸を掴んだ時点で雷が落ちるはずだし。そもそもさ」

「そもそも？」

「本物のみーちゃんなら、俺が童貞じゃないって知ってるんだから、さっきのセリフは有り得ないんだよね。」

「……………童貞じゃない。」

「そう。…あ、ちゃんと相手は地球人だよ。」

「……………くっ、くっくっくっ、アーハッハッハッ！トリッ
プ初心者童貞処女が定番なのに、くそっ予想外の展開だ。だが実に面白い。存在が面白いぞ、田中くん！」

「へ？」

突然煙が発生し、目の前のミネアだった人物は黒髪の青年の姿になっていた。彼方が呆気にとられていると、胸元から名刺を取り出し差し出した。

「……………株式会社トリッパー日本支局長、神崎彰、さ、ん？」

「はじめまして、田中くん。どうだい？異世界トリップ生活の方は順調かな。今日は突然悪いな。ダンジョンの評価面談日は、ダンジョンメイカーに事前通知しない決まりになってるんでね。冒険者に扮してダンジョンを探索させてもらったよ。中々よくできてるじゃないか。早速で悪いが、面談に入らせてもらっけどいいかい？」

「え、あ、はい。……………あ！」

「ん？何だい？」

「あ、のー、名刺にある年齢は、本当ですか？」

「そうだよ。真正正銘の58歳だ。見た目が若いのは若い時からトリッパーだからだよ。……………もしかしたら君もトリッパーを続けていたらいつまでも若々しくいられるかもね。」

リビングの椅子に向かい合わせで座った2人は、最初はぎこちなかったものの次第に打ち解け和やかに面談が進んだ。

「……………ふう、長々と質問に答えてくれてありがとう。所で、今日の地下10階ボスは魔物じゃないよね？」

「あ、わかります？魔物じゃない者を配置しちゃダメですよね？」

「……………カナイ、イチコー、おいで。」

現れたのは妖精族を偽装した魔物のカナイ、そして神崎を此処まで案内したイチコだ。

「「マスター呼んだ？」」

「神崎さん、この2人が現在の10階ボスです。」

カナイは家庭具作成のスキルで作った上位魔法書とピクシーの合成魔物です。イチコは家庭具作成スキルで作った上位魔法書と宝魔石ダイクジユエルの合成魔物を素材にして、家庭具作成スキルで作った市松人形を合成してできた生命体、即ち魔導人形です。」

「ふむ、イチコくんは何故魔物にしなかったんだい？」

「実は……………」

「獣神の加護？」

「そうなんです。あれが有る限り、魔物であるボスだと不利なんです。」

「むむむ……………」

「何とかならないですか？」

「…まあ、安心しなさい。実は此处へ来る前に依頼主であるアーシユラ神にお会いして、君に1つだけ願いを叶える権利を頂いてきたのだよ。」

「神様に面会！すげえー！」

「だからアーシユラ神には、君から造り出されたこのダンジョンの生物に限り、神の加護は効かないようお願いしておこう。獣神の加護以外にも、何とか神の加護を持つ者が現れるかも知れないしな。」

「ありがとうございます！よろしく願います！」

こうして面談は和やかな雰囲気で終わり、神崎はチャオと手を振って空間を裂いて去っていった。

神崎が向かったのはアーシユラ神の住む空間。神が持つ能力で造り出された空間は、地上にも宇宙にもなかった。人間の技術がいくら発展しようとも辿り着けない場所だ。だが、その場所の座標を知り、高位の転移魔法を使える者であれば、人間でも辿り着けるのだった。

その白一色に統一された空間で情眠に耽る人型が1体いた。勿論、

アーシユラ神に他ならない。ソファアに横たわっていたアーシユラ神は、ふとあるモノを思い出しニヤリと笑った。アーシユラ神が何もない目の前の空間に指を突き出すと、白く浅い平べったい箱が現れた。そう、これは神崎がお土産として持ってきた温泉饅頭だ。

「むふ、ふふふふん♪」

「バァ〜」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアア！」

アーシユラ神がウキウキと箱を開けると出てきたのは、生首だった。頭は剃髪した侍のようで、目と首から紅い血液がドクドクと垂れ流れている。アーシユラ神が、生首を目にした瞬間、生首の目がギョロリと動いた。

「おかあちゃん、助けてー」

アーシユラ神は生首が恐ろしく空間の隅に逃げ出し、足腰を激しく震わせていた。一方の生首は、恐怖状態に陥ったアーシユラ神に満足したのかニヤリと笑い、箱から飛び出した。

「…………アーシユラ神」

「ひっ！ち、近づくなっ！」

「…………アーシユラ神、私ですよ。ワ・タ・シ♪」

「えっ？」

生首は光輝き、その姿は人型へ変化していった。髪は黒髪に、装いはスーツへと。

アーシユラ神にアグス村の女子トイレに転移させられた事を、神崎は忘れていなかった。仕返しにと、アーシユラ神が苦手なホラー系で驚かせたのだった。しかし仕掛人の神崎も驚いていた。何故な

ら神崎は情報として、「アーシユラ神はホラー系が苦手」と知っていただけで、こんな震え上がるほどアーシユラ神が怯え幼児化するとは思いもしなかった。神崎の計画ではもう暫く生首状態でいる予定だったが、失禁しそうな状態のアーシユラ神を前に無理はできないと判断したのだった。

「あ、あああああー！」

「……………どうも、神崎です。」

「か、か、か、神崎か？あれは神崎だったのか？神崎かあー！」

アーシユラ神は饅頭の箱、神崎、天井の順に視線を何度も動かし、10分程繰り返して、やっと正常に戻った。その間神崎は、アーシユラ神の目の前で胡座をかき、饅頭を食べては煎茶を飲み、を繰り返していた。アーシユラ神が復帰した時には、箱の中身は半分に減っていた。

「ま、ま、饅頭がああああー！」

「御馳走様でした。」

「あう、あう、あう……」

またしてもアーシユラ神の状態は異常に変化し、元に戻るのに10分程かかった。その間神崎はアーシユラ神のお気に入りソファアで寛ぎ、何処から取り出したのかわからないテレビで、アカンアカンと騒ぐ某お笑い番組を観て爆笑していた。

「…して、何の用だ？」

「え？忘れたんですかー？新人へのプレゼントですよ。プ・レ・ゼ・ン・ト、ハア〜ト！」

「キモっ」

「あああー。心広い私は、先程の可愛いアーシユラ神の様子を録画

した映像を御茶会で披露しないつもりでしたのに、…残念です。」

「な、な、なんだって？」

「ええ、ですから、アーシユラ神が自世界をほっぽいて京都旅行に行っていた事に目を瞑る代わりに、新人トリッパ―に恩恵を下さると約束して下さったのに、それをなかった事にしようとしている。

そのように天帝との御茶会にて、……………先程の《おかあちゃん、助けて―》の場面映像と共に報告させていただきます。」

「声マネ上手いな。っ、じゃなくて!」

「では、ごきげんよう。」

「ま、ま、まて! わかったわかったわかった! わかったから、その報告は止めてくれ!」

「……………ふう、最初からそう言ってくればいいんですよ。ま、こちらの条件をアーシユラ神ごときに断れるはずもないのですが。」

「おまつ! どこの悪徳商人だ!」

「やはり、アーシユラ神のツツコミはイイですね。実にイイ。」

「Mか? 神崎、お前は実はMだったのか?」

「何言ってるんですか? 真っ昼間から変な事言っつて、このおませさんは。」

「だ、誰がおませさんだ!」

「そんなに頬を赤く染めて言っても説得力ありませんよ。」

「ぐぐぐっ! ……………堪える俺、堪えるんだ、堪えるんだ!」

「あ、そうそう。映像の件は、次のプレゼント分という事で、よろしいですね? じゃあ、今回のプレゼントの内容はこちらに書いてあるので、速やかな対処を期待しますよ。もし遅れるような事があれば……………流しますよ、神Newsに。ふふっ……………」

「ぐはっ……………」

こうしてアーシユラ神から新人ダンジョンメイカー田中彼方へ、新たな恩恵が与えられたのだった。

後にアーシュラ神は「神崎に逆らう者は地獄をみる」と、青ざめた表情で新人トリッパー達に語ったという。

彼方の冒険1（前書き）

お気に入りさんが増えてる！感激です。

読んで下さりありがとうございます。

彼方の冒険 1

ダンジョンが出現してから半年が経った。地下6階以降は奇抜で予想外な構造、加えて高位モンスターが頻出することから、初心者冒険者御断りダンジョンの認定を受けた。そしてダンジョン出現から3ヶ月が経った頃から、アグス村近辺の森などから家畜や魔物がゴーレムの様な者に連れ去られる目撃情報がギルド内に飛び込んだ。それと同時に家畜の様な見た目のモンスターがダンジョンに出現したとの報告がされた。どこからか、最下層には魔王がいて、ゴーレムを使って家畜などをさらい魔物化しているのでは、…といった様々な疑念があちこちの街で噂されるのだった。

そうしてアグス村は、村というのは名ばかりで、ハイレベル冒険者や観光客で賑わい、ゴーレム対策で街の周りに強固な壁が築かれ、大きな街へと変わっていった。

様々な人々がアグス村へ行き交う中、ひっそりと近辺の丘に佇む青年がいた。この世界では珍しい黒髪黒目の青年だが、不思議と周囲を行き交う人々の目に留まらなかった。魔法の気配はないのに、彼は空気のように注目を浴びる事はなかった。

「ふっふっふっ。半年ぶりの日の光だああああ！イエエイ」

彼、田中彼方はダンジョンメイカー4級を取得し、異世界トリックプして初の地上体験を喜んでいた。丘の上で叫ぶ彼方だったが、誰も気にも留めない。何故なら彼は万全の対策をとっていた。

「あ！そうだそうだ、ミスト解除っ」と

彼が首にかけていた七色の数珠の内、紫の玉が光ると彼の姿が誰の目にも映る状態になった。突然丘に人が現れた形だったが幸い周

困に人気はなく、騒がれる事はなかった。

「我ながら、万能アイテムを作ってしまった感じが……。まーいっか！」

彼の装いは一風変わっていた。黒衣の胴着を纏い、七色の数珠を首にかけ、銀の指輪と両腕に腕輪をつけている。右腕の腕輪の中央にはルビーが、左腕の腕輪の中央にはダイヤモンドが詰められていた。また足は銀に輝く金属製の下駄を履いていた。そして何故か手ぶらであった。

「さーってと、アグス村はどっちなー」

わくわくした気持ちを抑えられず彼方は丘を駆け下りていったのだった。

「アゝグス饅頭ゝアゝグスマんじゅうはいかがですかあー？ダンジョン地下25階でしか入手できない甘草を使った名物アグス饅頭。今ならお買得、5個の値段で10個買えちゃうキャンペーン実施中！さあ寄って寄って、買って買って！」

Hey！その兄ちゃん、新顔だね観光かい？試食はどうだい。うまいかい？どうどうどう、今日のおやつに、お茶の友に。おお、お買い上げありがとうございます！」

アグス村に入ると客引きの応酬の嵐だった。気づくと買う予定のなかった饅頭やら弁当やら御守りで両手は塞がっていた。精神的にもボロボロになった頃、なんとか冒険者ギルドに辿り着いたのだった。

ギルド内は神崎氏からの情報を事前入手していたため、ナイトスケルトンが大勢働いていたが驚く事はなかった。受付には若い女性

と壮年男性がいた。壮年男性は厳つい顔つきで苦手なタイプだと彼方は思ったが、男性の方しか空いてなかったので仕方無く向かった。

「よう坊主、子どもの遊び場にしちゃーちょっと早いぜ。」

「……………これでも１８です。ダンジョン探索許可を戴きたい。はい、ギルドカード。」

「あん？その見た目はどうみても１２、１３だろ。ギルドカードねえ……………はあ？オイオイ坊主嘘はいけねえぜ！ダンジョン商Ａランクだと？子どもは子どもらしい嘘をつくもんだぜ！」

「嘘でも子どもでもないし。」

「ハッ。悪い子どもにや、お仕置きしないとな。坊主、裏庭にこい！本当の実力暴いてやるぜ！」

日本人は異世界で若く見られるのは王道だ。加えて彼方は１６０cmの低身長。１８歳の彼方は、この世界の成人である１５歳よりも幼くみられた。

そしてギルドマスターが嘘だと決めつけたダンジョン商Ａランクとは、商業ギルドが認定するランクの１つだ。商業ギルドが認めたダンジョン商人は、ダンジョン内のアイテムを自由な価格で売買する権利とダンジョン内で移動露店を開く権利を持ち、ダンジョンにアイテム収集をしに探索する権利と能力を有している。ダンジョンという危険な場所へ単独で行くため、冒険者ランクよりもランク付けは厳しく、ダンジョン商の探索力は冒険者ランクより１つ格上と見なされる。よってダンジョン商Ａランクは冒険者Ｓランクと同等の実力を持つと言えるのだ。

ちなみに冒険者ランクは下からＧ・Ｆ・Ｅ・Ｄ・Ｃ・Ｂ・Ａ・Ｓ・Ｋとあり、キングのＫは伝説級で、実際の現在確認されている最上ランクはＳである。また商業ギルドのランクは下から、Ｇ・Ｆ・Ｅ・Ｄ・Ｃ・Ｂ・Ａ・Ｋとあり、各国の大手商会の会長がＫランクであり、Ａランク以上は非常に少ないのが現状だ。

ギルドマスターは現役時代、冒険者ランクAランクで名を馳せた魔法士だった。戦争時の功績からギルドマスターに推薦され、現在に至る。元Aランクのギルマスからみても、彼方に己より実力があるようには見えなかった。

「坊主、武器も構えなくていいのか？準備の時間ぐれえ、やるぜ」
「……………」

「ケツ、黙りかよ。ナメてるのか？後からやっぱり時間をくれとか文句いうなよ！……………《シルバーゴーレム》先手必勝！」

「ふうー《融解》」

土属性の魔法士であるギルマスは、短縮詠唱で土中から銀を集めゴーレムを作成した。流石は元Aランク、近場に銀は殆どない地質にも関わらず、熊ほどの大きいゴーレムをつくるほどの銀を数秒で集めた。

だがチートアイテムを持つ彼方には敵わない。彼方は数珠の内、赤い玉に触れて一言呟いた。魔力も使わず、ただ玉に触れて呟くだけ。たったそれだけで目の前のゴーレムは赤い光に包まれ、一瞬で溶けてしまった。

「なっ！ばかな！」

「音無、影縫い、封鎖」

「っ……………」

「オジサン、これで喋れないし動けないし、魔力も出せないよ。どうする？」

ギルドマスターは突然の事態に、目の前の青年に恐怖した。声を上げたなくても口はパクパクすりだけで、息しかでない。身動きしようにも、金縛りにあっているかのように動けない。無詠唱で魔法を

発しようにも、魔力放出ができなかった。

「降参して、ダンジョン探索許可してくれるなら瞬きを2回。降参しな……ああ降参してくれるんですね。それでは解除。」

「あ、ああ、喋れる。一体おめえは」

「詮索はしないでくださいね。……死にたくなければ。」

黒い笑みを向けられたギルドマスターは、ゾツとして目に見えない速さで許可証を用意すると彼方を渡し、受付の奥に引っ込んだ。珍しく青い顔を浮かべたマスターを不審に思った受付嬢ナーシエは、先程までマスターが対応していた彼方へ話しかけた。

「あのー？マスターと何か？」

「え？……君、カワイイね！僕の事はカナタンって呼んでね！」

「え？力、カナタン？」

「萌え〜」

ギルドマスターと対峙していた時とキャラが違うが、これも田中彼方の一面だった。男性と女性に対するキャラが全く違った。特に貫禄ある年上の男性とタイプ外の女性には容赦なかった。幸いナーシエはタイプの容姿だったため、冷たくあしらわれる事はなかった。

一方同時刻のダンジョン管理室は5人の女の子達が、わいわいと騒いでいた。1人はダンジョンの各階を操作し、1人はポテトチップスを食べながら映画を観ていた。そして、とあるテレビ画面に釘付けの女性が3人、市松人形のイチコ・ブラックフェアリーのカナイ・獣人のミネアだ。画面に映っているのは黒髪の青年、……そう彼女らの主人である。

「あれが噂の鬼畜ギルドマスター！」

「渋いです。」

「カナタンふぁいとぉ」

「てかさ、マスターキャラ違うね？」

「なんだ。」

「毒でも食べたのかしら？」

画面は進み、ギルドマスターは身動きが取れない様だ。

「はうわー」

「チートですね、アレ」

「流石カナタン！」

アレとは彼方が作成したチートアイテムの1つ、七色の数珠だ。

家庭具作成スキルでは何故か、『これは家庭具！』と認識してしまうと様々なモノをつくりだせた。強力な武具はつくれないが、鑑賞用の武具はつくれる。また魔法書も、上級魔法士の家には気軽に本棚に入っているはず、と思いこむと作り出せた。ある程度のルールはあるものの、いい加減なスキルであった。

「音無は発声を封じたから風属性ね。よって白玉！」

「影縫いは、闇属性だから、えつと黒？」

「封鎖？なんだろ」

「ん、あ！わかった！」

「カナイさん、答えは？」

「魔力を封じる、封印魔法。即ち神術。だから玉は紫！」

「なるほど」

七色の数珠は全属性の魔法を使えるチートアイテム。魔法士でなくても使え、魔力消費もゼロ。誰もが喉から手を出したくなる魔具であった。異世界トリップの王道は魔法であったが、彼方には魔力

はなかった。その事実を知った時、絶望感を味わったが、カナイをつくれた結果から希望を見いだし魔法を使えるアイテムをつくってしまったのだ。もちろんこれも家庭具として作成された。

「それにしても、あの紫の玉。」

「ん？」

「どうやって作ったのかしら？」

「さあ？」

「まあカナタンだし？」

「あは、だよねー。アハハ」

「ヘックシツ！」

冒険者ギルドを後にした彼方は、商業ギルドに寄り、アグス村中央広場で露店を開いていた。

年代物の古めかしい雰囲気のある武具や魔具が、露店に飾られた。見る目の無い者がみれば、ガラクタだが、見る目のある者が見れば、それらが強力な武具だとわかるモノばかりだった。彼方は特に客引きはせず、読書しながら客を待つ。昨日までいなかった露店に好奇心で近づく者が多かったが、大半は大したモノではないと判断し、2時間も経つと殆ど客は訪れなかった。

そろそろ店を閉めようかという時、3人組の冒険者が現れた。どこかでみた事ある剣士と魔法士風の女性、もう1人は初めて見るエルフだ。

「あれ？カナタン？」

「はろー、ナーシエ」

「「知り合い？」」

「午前中に冒険者ギルドで仲良くなったの」

「冒険者が露店？」

「あーうん。これでもダンジョン商人だからさ、俺。」
「へえー子どもなのに偉いな坊主。」

ピキッ

「ん？なんか変な音したような」

「バ、バルー！」

「この馬鹿！」

彼方の表情は黒くなっていくのに、バルーは全く気付く気配はなかった。彼方の実年齢を知っているナーシェや人間の年齢を見抜く能力を持つエルフの女性には、バルーの一言は禁句であったと青ざめる。バルーは武具が珍しく強いものだと思わづき物色していると、近くから凍える冷気を感じ、思わず顔をあげた。

「ふっふっふっ、お気に召しましたか、お客様？」

「ハッ！」

黒い笑みと冷気を浴びてバルーは何か失敗した事に気付くが、既に遅し。

「て、店主、何か怒らせるような事をしてしまったようだ。すまない！」

「今更謝られても、ねえ？」

「力、カナタン？私に免じて許してあげて！」

「て、店主殿、この馬鹿は妾が教育しておくからの！」

「ふっ、美女2人に頼まれたら断れませんか。百歩譲って許してあげましょう。でも、この方には今後何も売りませんから！」

「なっ！横暴だ！」

「…あ、ナーシェさんにオススメの魔具は」

「無視か？」

「エルフたんのお名前は？」

「エルフたん……………」

「無視するなあー！」

バルーを無視して女性2人の対応を شدした彼方。彼方の対応に苛ついたバルーは、店先で喧しく騒いだ。すると、先程よりも黒い笑みをした彼方が振り返ったのだった。

「…………… ねえ、お兄さん。ダンジョン商Aランクの俺に、そんな暴言を吐いて良いと思ってる？イケメンだからって、何でも許されるとも思ってる？ねえ、見た目だけで人の歳が計れるとでも？俺は18だっつーの！この街の男共はどいつもコイツも、坊主坊主ママのオッパイ吸ってるだと？ああん？」

「そ、そこまでは言っていないが」

「うっさいハエだなー。黙れよ！音無。」

「っ……………」

「あれは！発声を封じる魔法？」

「んゝ、魔力の放出はなかったが。」

「魔具って事？」

「わからん。」

バルーは謝ったのに、彼方が益々怒る訳が理解できなかった。何故か声を出すことも封じられ、文句も言えなかった。

「ま、俺に勝てたら売ってあげてもいいぜー！」

「っ……………」

「ねえ、ダンジョン商Aランクって冒険者Sランク相当よね、メル？」

「であつたな。バルーは？」

「最近Aにランクアップしたばかりよ。」

「……………勝てる気がしないな。」

「そうね。」

パーティーメンバーはバルーは負けると予想していたが、当の本人は闘志をメラメラ燃やしていた。その気持ちに応えた火精霊は、バルーの全身を蒼い炎で纏わせた。

「ふうん、やる気満々?……………凍える息吹。」

バルーは剣を構え彼方に斬りかかった。しかし剣が彼方に届く前にバルーの体は氷で覆われ、辛うじて呼吸用に鼻と口元に穴が空いてるだけだった。バルーを守る精霊は必死に氷を溶かそうと試みるも、全く変化は見られなかった。結局バルーは彼方に敗北し、ナーシエ達が宿へ引きずって去っていったのだった。

その日の夜の酒場は、とある商会の話題で盛り上がった。

「あれはたまげたな!」

「あの見た目で18!」

「ダンジョン商Aランク、ツエエエエエ!」

「あの強さ、鬼パネエー」

「アニキ、俺を弟子にしてくれえー!」

「スター商会かあ」

訪れてたった1日で彼方は、街の要注意人物と化したのだった。ある人はあの禁句を発しないよう怯え、ある人は彼の強さに憧れた。ある人は彼の魔具を狙い、ある人はファンクラブを作り彼を守ろうと画策した。善くも悪くも、街に歓迎された彼方であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3737x/>

ダンジョントリッパー

2011年11月10日01時30分発行